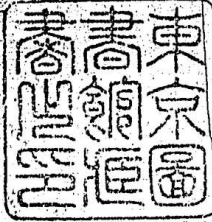


人祖論

三

7  
3  
///

Ⓜ



人祖論卷之三目錄

卷之三

第二編 人類ノ獸類ヨリ遞進セシ方法ヲ論

ズ

○人心及ビ人體ノ變化スル所以ヲ論ズ

遺傳ヲ論ズ

變化ノ原由ヲ論ズ

身體ノ變化スル規則ハ人獸ニ於テ異ナル

トコロナキ所以ヲ論ズ

○境遇變革ノ直接分明ナル影響ヲ論ズ

- 體部ノ使用増減セル成果ヲ論ズ
- 暢發ノ停住ヲ論ズ
- 復古造構ヲ論ズ
- 連發變化ヲ論ズ
- 偶然變化ヲ論ズ
- 人口増殖ノ度ヲ論ズ
- 天然撰擇ヲ論ズ
- 天然撰擇ヲ論ズ
- 人口増殖ノ妨害ヲ論ズ
- 人類ノ萬物ニ靈タル所以ヲ論ズ
- 人體造構ノ妙用ヲ論ズ

- 人身ノ守ナク助ナキ情態ヲ論ズ
- 天然撰擇以下ヲ結論ス
- 人類ノ尾ヲ失セシ所以ヲ論ズ
- 人類ノ赤身ナル所以ヲ論ズ
- 人類ノ境域ハ未ダ遠カニ定ムベカラザル所以ヲ論ズ
- 天然撰擇以下ヲ結論ス
- 人身ノ守ナク助ナキ情態ヲ論ズ
- 人類ノ直立セシ原由ヲ論ズ
- 人體ノ直立セシヨリ生ゼシ變化ヲ論ズ
- 牙ノ衰微セシ所以ヲ論ズ
- 頭顱ノ大ヲ増シ形ヲ變ゼシ所以ヲ論ズ
- 人類ノ赤身ナル所以ヲ論ズ
- 人類ノ尾ヲ失セシ所以ヲ論ズ
- 天撰ノ境域ハ未ダ遠カニ定ムベカラザル所以ヲ論ズ
- 天然撰擇以下ヲ結論ス
- 人身ノ守ナク助ナキ情態ヲ論ズ

人祖論卷之二目錄終

人祖論卷之二

英國 查爾斯駝韻著  
日本 神津專三郎譯

第二編 人類ノ獸類ヨリ遞進セシ方法ヲ論

人心及ヒ人體ノ變化スル所以ヲ論ズ  
諸人類ハ心身ノ變化シテサレニ一定セザルハ  
太ダ明カナリトヒ同種ノ人種ニ屬スル者ト  
雖モ二人同一ナル者未ダ曾テ之アラズ百万人

○千八百六十九年印行、額德氏、兵統計表、第五百五十六葉  
 ○千八百六十八年印行、費拉特、格物學、特報、中、學、士、埃、利、加、土、人、頭、形、論、波、洲、人、ニ、就、テ、ハ、千、八、百、六、十、三、年、印、行、雷、以、爾、人、類、古、蹟、考、第、八、十、七、葉、哈、屈、禮、ノ、論、山、德、維、知、人、ニ、係

ノ面ハナホ百万種ニ人モ異ナラザルハナシ、身體諸部ノ大小長短モマタ然リ、脛脚最モ常ニ長短アリ、頭形モ通例全世界ノ中一地方ニ於テハヤ、長大ナルアリ、一地方ニ於テハヤ、短小ナルアリ、然レ更ニ子細ノ形状ニ至リテハ、亞米利加及ビ南部豪斯土刺利亞ノ土人マタハ山德維知ノ如キ狭小ナル一島地ニ生活スル人種ノ中ニ於テモ、千變万化極リナシ、有名ナル齒醫ニ據レバ、齒牙ノ變化アルナホ容貌ニ於ケルガゴトシ、大動脈マタ數歪道ヲ循環スルアリ、故

リテハ千八百六十八年波洲人ニ就テハ千八百六十八年印行、雷以爾人類古蹟考、第八十七葉、哈屈禮ノ論、山德維知人ニ係、○千八百四十四年印行、屈印、滿頭殼論、第十、八葉ヲ見ヨ、○千八百四十四年印行、屈印、動脈解剖論、序文ヲ見ヨ、○查下不學士、會院雜誌、第二、十四卷、第百七、十五、第百八、十九葉ヲ見ヨ、○千八百六十七年印行、學士、會院報告、第五

ニ外科學ニ關シ血液循環ノ正非ヲ判セント欲スレバ、則チ人體一千零四十餘ヲ檢察シ、以テ之ヲ校計セザルヲ得ストイフ、筋ノ變化アル同シク非常ナリ、博士土耳拿嘗テ足筋ヲ檢察セシニ、五十人中其同一ナルモノ二人ヲ得ル、難ク動モスレバ變化ノ度甚ダシキモノアリ、且其運轉勢力モマタ自カラ其變化ノ度ニ隨ヘリ、烏德氏曰ク、三十六人ニ二百九十五筋ノ變化アリ、マタ同數ノ人ニ、體ノ兩脇ニ於ケルモノヲ以テ計シテ之ヲ一トナシ、ナホ其變化五百五十

百四十四葉同  
六十八年印行  
第四百八十三  
第五百廿四葉  
下タ是ヨリ先  
二千八百六十  
六年印行第二  
百廿九葉ニモ  
已ニ之ヲ論セ  
八  
⑧千八百六十  
八年印行  
醫學術院報告  
第四百一葉  
⑨千七百七十  
八年印行  
醫學術院報告

ハ餘ノ大數ニ至リシモアリ、更ニ三十六人ハ、通  
常校用解剖論ニ説明スル筋ノ定規ニ戻ラザル  
モノ實ニ一人モ之ナク却テ其變化ノ非常ナル  
モノアリ、或ハ一人ニ其數二十有餘ノ多キア  
リ、或ハ同筋ニ其變化ノ數様ナルアリト、博  
麥嘉理斯得ハ⑥蹠筋ノ附屬筋ニ二十餘種ノ變  
化アリトイヘリ、  
解剖學ノ老手烏取布曰ク⑦臟腑ハ變化ハルハ  
却テ外部ニ勝リ、人同シカラザレバ、一小部分ト  
雖モ、幾何かミナ其情狀ヲ異ニセザルハナシト、

告第二號第二  
百十七葉

ト夕書ヲ著シテ臟腑ヲ圖解シ以テ此說ヲ更張  
セリ、但シ其肝肺腎諸臟ニ係ル想像論ハ、恰カモ  
人面ヲ以テ神顔ニ肖タリトスル如ク、其昔吾人  
ノ耳ニ觸レテ頗ル奇異ナルヲ覺ヘシム、  
人種同シカラズノ其才能ヲ異ニスルハ、固ヨ  
リ之ヲ問ハザルモ、今其人種ヲ同ウシテ、而シテ  
ホ且其才能ノ變化アルハ、論ヲ竝タズノ明カナ  
リ、獸類ニタ然リ、其證據乎トノ據ルベキアリ、犬  
馬牛羊ノ如キニ至リテハ、世人自カラ之ヲ知レ  
リ、貌廉嘗テ猿類ヲ亞弗利加ニ養馴セシニ各才

○  
 〇貌廉動物略  
 傳第一卷第五  
 十八第八十七  
 節蓮芽巴羅圭  
 哺乳類論第五  
 十七節  
 〇養馴動植變  
 進論第二卷第  
 十二章

智性情ヲ異ニセリ一大猴ノ秀才ナルハ、屢人ヲ  
 驚カシメシモアリト、生物園ノ監者一日余ニ示  
 シタルハ、新世界部類ニ屬スル猿類ナリシガ、其  
 智力均シク衆ニ抽ンデシモノナリキ、蓮芽マタ  
 猿類ヲ巴羅圭ニ養ヒシニ、同種類ニノナホ其心  
 性一モ異ナラザルハナカリシトナリ、斯ル變化  
 ハ、或ハ遺傳ニ出デ、或ハ其教養ノ方法ニ由テ以  
 テ然ルヲ致セシモノナリトイフ<sup>①</sup>

遺傳ヲ論ス

余嘗テ本旨ニ係リ講究スル所アリ<sup>②</sup>、更ニ此ニ

〇千八百六十  
 九年印行遺傳  
 才能

及ブヲ要セス、小大輕重ノ遺傳殆ンド之ヲ悉セ  
 リ、就テ觀ルベシ、其例ミナ獸類ニ於テ類似スル  
 モノアリト雖モ、殊ニ人類ニ於テ發見スル所ナ  
 リ、夫ノ犬馬牛羊ノ如キ、其性質ヲ遺傳スルハ最  
 モ尋常ニシテ、好嗜及ビ習慣ハイフモ故ナリ、心意  
 ニ涉ルモノト雖モ、マタ之ヲ遺傳シ、或ハ才能ヲ  
 傳ヘ、或ハ勇氣ヲ留メ、或ハ善不善ノ性情ヲ遺ス  
 アリ、人類マタ均シク之ヲ遺傳シ、家トシテ、其  
 證アラザルハナシ、蓋シ之ヲ牙耳東氏ノ著書<sup>③</sup>  
 ニ徵スルニ、卓越高尚ハ才能ヨク祖遺ニ係リ、狂

且論

痴魯鈍ノ性屢血脈ヲ傳留セリ、

變化ノ原由ヲ論ズ

人類ノ心身ニ變化ヲ致ス所以ノ原由ハ未ダ之ヲ詳ニセズト雖モ變化ハ原由ハ人類ニ於ケルハナホ獸類ニ於ケルガ如ク必ズヤ其世々經歷セル境遇ニ由ル下明カナリ然リ而ノ諸人種ニ於テ變化ノ多端ナルハマタ家生動物ニ符合スル所アリ家生動物ハ之ヲ野生動物ニ比スルニ其變化サラニ多シ是レ即チ世々經歷スル境遇ハ極リナキ所以ナリ縦ヒ一箇ノ人種テ屬スル

白逸氏南亞米利加ノ土人ニ係ル説アリ  
千八百六十三年西摩遜河博物記第二卷第百五十九葉

モノト雖モ亞米利加人種ノ如ク廣大ナル地方ニ散居スル片ハ各自ノ者ニ於テ變化ノ多端ナルモ亦然リトス人類愈開進スレバ其境遇ハ影響ヲ受クル下愈増加セリ何ニトナレバ其社會ニ在テ品位ヲ異ニシ職分ヲ同ウセザル者ハ各ミナ變化ヲ異ニシ其多端ナルハ遠ク未開人民ノ及バザル所ナレバナリ然リト雖モ或ハ屢臆想ニ失シ蠻民ヲ以テ全ク一定ナリトスル者アリ是レ大ニ謬テリ其實動モスレバ却テ一定ノ造構ナシニ而シテ今姑ラク經歷ノ境遇ニノミ就



◎貌拉孟拔人  
類論英譯十八  
百六十五年印  
行第二百五葉  
ヲ見ヨ

テ之ヲ推究スルニ、獨リ人類ヲ以テ生物中最モ  
馴化セシ者ナリトスルハ③、マタ太ダシキ失見  
トイフベシ、其故何ソヤ、蓋シ濠洲人種ノ如キ野  
蠻ノ人民中、其經歷スル境遇褊小ニメ、却テ闊大  
ナル地方ニ在テ境遇百端ヲ經歷スル動物ニ如  
カザル者アレバナリ、然リト雖モ更ニ重大ナル  
事件ニ就テハ何如ニ養馴化育セル動物ト雖モ  
決ノ人類ニ及バザル所以ノモノアリ、抑人類ハ  
生殖上至大ハ自由ヲ享有セリ、故ニ一種一族ハ  
リト累代規則ハ束縛ヲ受ケ、又ハ不意ニ撰擇セ

ラレ、主人ハ爲ニ其特質ヲ保留スルニ至リシ如  
キ強迫ニ屬セシ者未ダ曾テ之アラズ、マタ彼ノ  
有名ナル普魯細亞ノ壯士隊ヲ除キテハ、古來某  
ノ男女ヲ特撰シ以テ之ヲ強配セシメシトナシ、  
此兵隊ハ獨リ法度ヲ以テ合格ナル男女ヲ配偶  
セシメタリ、是レ所謂人類ノ撰擇ニ屬セシ一例  
ナリ、何ニトナレバ其村落ヨリ高長偉大ナル者  
輩出セシヲ以テナリ、マタ土巴耳太ニ於テ之ニ  
等シキ撰擇ノ制度アリ、小兒出産ノ後直チニ之  
ヲ檢察シ、體格善良ニノ精神活潑ナルモノハ採

○史第百八

十二葉ヲ見ヨ

凡ノ男子タル

者其妻ヲ選テ

ニ方テマツ第

一ニ子孫ノ使

康ト智勇トニ

著眼スベキハ

抑希臘普通ノ

傳説ナリシ

マタ談話本記

第二卷第四葉

ニ明カナリ

○且設阿尼士

ハ紀元前五

百五十年ノ頃

名ヲ得シ希臘

ノ詩人ナルガ

既ニ男女相撰

ノ真ニ行ハレ

ナバ人生無窮

ノ福社ヲ

與フベキ所以

ヲ明認セリ然

レバ此相撰ハ

數金銀ノ爲ニ

行ハレザレバ

深ク之ヲ憂ヘ

ク其詩

ニ曰ク

買牛買馬皆由

例規撰種擇類

未問財貨善良

是揀不良是撰

謀利謀益亦謀

擊且

人牛配偶獨在

錢價男爲之娶

女爲之嫁日愚

曰惡有福有祿

能使子孫配彼

門族無貴無賤

混爲一羣敗風

壞俗惟可驚君

請君莫驚其因

分明徒憂結果

豈能所成

○一十八百七十

二年刊行大里

耳譯述第二卷

第三百三十四

葉譯者曰余未

夕詩歌ヲ學ハ

ズ況ンヤ之ヲ

譯スルオヤ然

レバ埃リニ之

ヲ詩句ニ擬フ

ハ蓋シ本書譯

述上止ヲ得サ

ルニ出デタ

テ之ヲ養育シ然ラザル者ハ棄テ之ヲ灰凶ニ屬

セシタシトイフ

身體ノ變化スル規則ハ人獸ニ於テ異ナ

ルトコロナキ所以ヲ論ズ

例ヘバ人類ノ總種ヲ以テ一種ノ生物ト看做サ

バ其種固ヨリ大ナリト雖モ亞米利加種葡耳納

細亞種等ノ如キ各自ノ人種モマタ之ヲ大ナリ

トイハザルヲ得ズ抑生物ノ大族ハ之ヲ小族ニ

比スレバ其變化モ隨テ大ナルハ確乎不拔ノ定

則ナリ而メ人類ノ變化ハ養馴動物ノ如キ際限

アルモノ、變化ニ類似スルヨリ寧ロ非常ニ大

族ナル動物ノ變化ニ符合スルトコロアリ、

夫レ變化ハ生ズルヤ人獸二類トモニ其原由ヲ

同カスルハミナラズナホ二類等シク之ヲ身體

ノ同部ニ致シ其體裁モマタ之ヲ同クセリ、吳德

ル

ル

ル

リ其體裁ノ如  
キハ真ノ直譯  
ニメ固ヨリ觀  
ルニ足ラズ大  
方ノ君子幸ニ  
笑フナカレ  
◎一十八百五十  
九年印行吳德  
倫生物論第二  
卷第三章及ビ  
千八百六十二  
年印行客得非  
地人類推原并  
ニ千八百六十  
六年ヨリ同六  
十八年ニ至ル  
學術雜誌中ノ

人類論ヲ見ヨ  
千八百三十  
二年印行不正  
遺構論第一卷

倫客得非地ノ二氏之ヲ論シ頗ル餘蘊ナシ  
敢テコ、ニ贅セズ變化ノ始メ大ニノ後漸ヤク  
小ナルニ至ルアリ是レマタ人獸其情ヲ一ニセ  
リ故ニ嘗テ以西德饒弗禮仙實禮亞ノ論ズル如  
ク⑤之ヲ同部類ニ屬シ之ニ同名ヲ下シテ可ナ  
リ向ニ余ガ撰述セシ養馴動植變進論ニ條陳シ  
タル變化ノ規則ハ大略左ノ如シ  
境遇變革ハ直接分明ナル影響ハ同一ハ事情ヨ  
リ同一ハ變化ヲ盡ク同一ハ生物ニ致スベシ  
體部ハ使用増減スレバ必ズ本部ニ其結果ヲ生

ズベシ  
同部ハ分子相凝聚スルキハ其兩部必ズ粘着合  
一スベシ例ヘバ二頭粘着シテ一頭二面トナリ  
又ハ二背合一シテ一體八肢トナリシ怪物ノ生  
ズルガ如シ  
多數ヨリ成立スル機關又ハ部分ハ容易ニ變化  
スベシ所謂多數ヨリ成立スル機關又ハ部分ト  
ハ齒牙指趾若クハ草木花ハ雄藥雌藥等ノ如キ  
者是ナリ  
身體ノ一部分衰微スレバ成長上ノ應報ニ由テ

人類論 卷三

他ノ一部分暢發シ或ハ其一部分特ニ暢發スレ  
 バ他ノ部分爲ニ衰微スベシ  
 甲部ハ乙部ヲ壓抑スルハ乙部輒チ變ズヘシ  
 例ヘバ未ダ子宮中ニ在ル小兒ノ尻骨盤ノ頭顱  
 ヲ壓抑セシ成果ノ如シ  
 一部ハ暢發全ク停住スレハ本部遂ニ衰滅スベ  
 シ  
 體部ハ造構復古スレハ既凶造構ヲ再興スベシ  
 彼此ハ部分暗ニ連絡ヲ通ズル所アレハ其變化  
 必ズ連發スベシ

④本旨ハ既ニ  
 養嗣動植變進  
 論第二卷第二  
 十二第二十三  
 章ニ詳悉セリ  
 ○千八百六十  
 八年 薩摩氏中  
 際感化論ノ著  
 アリ其植物ニ  
 係ルヤ切ニ主  
 質ノ功用ヲ論  
 セリ

以上ニ舉ル規則ハ人類及ビ獸類ニ通用スルモ  
 ノニメ、其中多クハナホ植物ニモ適スベキモノ  
 アリ、今一々之ヲ討論スルハ殆ンド徒勞ニ屬セ  
 リ、故ニ就中要旨ノ數項ヲ撮摘シテ、逐次ニ之ヲ  
 講究セント欲ス④  
 境遇變革ノ直接分明ナル影響ヲ論ズ  
 夫レ本旨ハ至難ノ問題ナリ、然レモ生物ノ境遇  
 ノ變革スル片ハ其影響ノ必ズ之ニ及ブヤ毫モ  
 疑ナシ、意フニ十分ノ星霜ヲ經バ、果シテ其爾ル  
 ヲ目撃スルニ至ルベシ、惜ラクハ余未ダ其適證

且論 卷二

九

百千八百六十  
 九年印行、額德  
 陸兵統計表第  
 九十三第百零  
 七第百廿六第  
 百三十一、第百  
 三十四葉ノ見、

得ザルヲ、抑生物ノ體部造構ハ其數殆ンド極  
 リナク、而ノ其用各歸スル所アリ、宜ナル乎夫ノ  
 反對論者ガ之ヲ以テ境遇變革ノ影響トセス、一  
 向特殊創造ニ係ルノ所以ナリトスルヤ、然レハ  
 生物ハ境遇ハ之ガ模型ニハ其變革ニ由テ生ズ  
 ル影響ハ千趣萬態サテニ極リナシ  
 嚮ニ合衆國南北ノ役ニ服事セシ兵卒一百万餘  
 人ノ身體大小及ビ出生ノ州部ヲモ檢察シテ子  
 細ニ之ヲ記録セルモノアリ、此ノ如キ非常ナ  
 ル大數ノ檢察ニ就テ之ヲ考フレバ、昭々トメ各

地ニ固有ハ原由アリ、以テ身體大小ハ差異ヲ致  
 セリ、加之出産ノ州部ニハ父祖ハ遺傳アリ、其後  
 成長ノ州部ニハ新受ハ感觸アリ、ミナ以テ身體  
 大小ニミルベキ影響ヲ與ヘタリ、例ヘバ東部ノ  
 地方ニ出産シ、而ノ身體成長ノ年代ニ方テ西部  
 ノ州土ニ移住セシ者ハ、其身體ヤ、大ナルヲ致  
 セリ、之ニ反シテ水夫ノ如キ生計ヲ營ム者ハ、其  
 身體ヤ、小ナルニ至レリ、何ニトナレバ其齡十  
 七八歳ニ及ブ兵卒ト水夫トヲ比較スルニ、其異  
 ナル甚ダシ、額德氏嘗テ此原由ヲ推シ、以テ身長

八 且 命 卷 二

①葡耳納細亞  
人ニ係リテハ  
千八百四十七  
年印行、普理加  
徳人體浴華史

ニ影響ヲ生ズル所以ヲ究察セシガ、到底反對ノ  
 説ニ決シ、此原由ハ敢テ氣候ハ寒暖、土地ハ高低  
 及ビ生活ハ安窮ノ與カラザル者トセリ、然レモ  
 終リノ箇條ニイヘル生活ハ安窮ハ與カラザル  
 云云ノ論ハ、佛蘭西ノ諸部ニ於テ徵兵ノ身體ヲ  
 檢査シタル統計表ニ據ル未耳、美ノ説ニ反セリ、  
 マタ之ヲ比較スルニ、或ハ葡耳納細亞ノ酋長ト  
 同島下等ノ蠻民トヲ以テシ、或ハ同洋ニ屬スル  
 噴火島ノ生蕃ト低濕ニモ荒漠ナル珊瑚島ノ野  
 人トヲ以テシ、<sup>②</sup>或ハ非地ノ彼此生資ヲ異ニス

第四百四十五第  
二百八十三葉  
及ビ吳德倫生  
物論第二卷第  
二百八十九葉  
ヲ見ヨ○廢地  
上流沿岸及ビ  
便加爾ニ住ス  
ル殆ンド同種  
ノ印度人ニ容  
貌ノ非常ナル  
不同アリ、義耳  
賓斯東印度史  
第一卷第三百  
廿四葉ヲ見ヨ、

ル東岸ノ住人ト西岸ノ居民トヲ以テスルニ、何  
 レモ善良ナル食物ト生路ノ安樂ナルトハ、必ズ  
 身長ニ影響ヲ生ズル、其理太ダ分明ナリ、然リ  
 ト雖モ、此論旨ニ係リ是非ヲ決スルノ難キハ、已  
 ニ上述スル如ク、諸家ノ説ノ區區ニメ合ハザル  
 ヲ以テモ推テ知ルベシ、學士伯堂近來論ズル所  
 ニ據レバ、英國人民ノ都府ニ住スル者ト或ル種  
 類ノ職業ヲ務ムル者トハ、體長ヲ縮セシムル  
 ノ患アリ、而モ此成果ハ動モスレバ遺傳セリ、合  
 衆國ト雖モマタ然リ、且身體ノ暢發最高ノ度ヲ

人祖論 卷二

⑧ 千八百六十七年ヨリ同六十九年ニ至ル人類學社記録第三卷第五百六十一、第五百六十五、第五百六十七葉  
 ⑨ 千八百六十九年六月十九日及び七月十七日印行、醫學新聞中學士伯拉堅律日病根論ヲ見ヨ

達スルハ其精力智能モマタ均シク最高ノ位地ニ達セリトイフ⑨  
 更ニ直接ノ影響ヲ人類ニ生ズルノ外因アリヤ否ヤハ未ダ之ヲ審カニセズ然リト雖モ肺ト腎トハ寒冷ニ方テ其活カヲ増シ肝ト膚トハ温熱ニ際シ其強壯ヲ致スガ如ク季候ハ變化ノ影響ヲ生ズルハ確乎トハ憑ルベキアリ⑩蓋シ往時ハ膚色ト毛髮トハ或ハ日光或ハ日熱ニ因ルモノトセリ然レド此等ノ原由ヨリ膚色ト毛髮トニ或ハ影響ヲ生ゼザルニ非ルモ方今諸學者ノ

説ノ歸スル所ハ烈日ニ曝露スル一縦ヒ數世ニ彌ルト雖モ其影響ノ及グヤ殊ニ尠シトスナホ此論題ニ係ル議論ハ後編ニ於テ種々ノ人種ヲ論ズル條下ニ就テ更ニ之ヲ詳カニスベシ惟フニ家生動物ニ在テハ氣候ハ寒熱ハ毛髮ハ生長ニ影響ヲ生ズル下其證ハシトセズ然レド其人類ニ關スル者ハ未ダ之ヲ得ザルナリ  
 體部ノ使用増減セル成果ヲ論ズ  
 體部ノ使用ハ肌筋ヲメ強剛ナラシメ不使用若クハ一神系ノ廢滅ハ之ヲメ柔弱ナラシメリ是

◎養馴動植變  
進論第二卷第  
二百九十七葉  
ヨリ第三百葉  
ニ至リ諸家ノ  
說及ビ養馴進  
新報第五卷第  
一篇中日牙氏  
骨長論ヲ見ヨ

◎千八百六十  
九年印行額德  
統計表第二百  
八十八葉

故ニ眼目ヲ傷レハ屢視神系ヲ衰凶シ、動脈管ヲ  
結埋スレバ其屬管ヲ大ナラシメ且之ヲ被覆  
スル衣膜ハ厚サヲ増シ勢ヒヲ加テ腎臟ハ一方  
病ハ爲ニ活用ヲ失スレバ他ハ一方其大ヲ増シ  
二方ハ職務ヲ兼理ス重荷ヲ運送スル者ハ獨リ  
其骨骼ヲ大ナラシムルハミナラズナホ其長ヲ  
加ヘリ◎其他家業ヲ異ニスル者ハミナ身體ノ  
大小長短ヲ異ニセリ嘗テ合衆國政府ニ於テ調  
査セシ所ニ據ルニ◎往年南北ノ役ニ服事セシ  
水夫ハ平均シテ其身體ヤ、短小ナレバ脛ハ兵

卒ヨリ長キ一英寸ノ〇・二一七ニシテ其臂ハ却  
テ之ニ及バザル一英寸及ビ〇・〇九ナリ然レ  
バ體長ノ少シク長キヲ以テ臂ノ甚ダ短カキニ  
比スレバ、拉多補少シテ水夫ハ到底短カキ者ニ  
テアリキ夫レ此ノ如ク臂長ノ短カキヲ致セシ  
所以ハ水夫ノ多ク之ヲ使用スルヲ以テ然ルニ  
似タリ實ニ此成果ハ意外ニ出デタリトイフベ  
シ、但シ水夫ノ腕臂ヲ使用スルハ、重物ヲ彼ヨリ  
我ニ引クニアリ、而シテ下ヨリ上ニ揚クル  
ナシマタ水夫ノ頸ノ周圍及ビ脚背ハ兵卒ヨリ



千八百三十  
年印行巴羅  
哺乳類論第四  
節

甚ダ大ナリ、然レド其胸膈腰腿ニ至リテハ遠ク  
之ニ及バザリシ者ナリ、  
若シ世々家業ヲ同ウセバ、以上ニ論ズル變形ノ  
如キ必ズ遺傳スベキヤ如何ハ得テ之ヲ明言ス  
ベカラズト雖モ、マタ敢テ其理ナシトセズ、蓮芽  
③ハ亞米利加ノ土人白亞牙種族ノ瘠脛肥腕ナ  
ルヲ以テ、累代其生ヲ舟ニ送り、獨リ腕カヲ使  
用シ、而シテ脛ヲバ廢シテ之ヲ使用セザル所以ニ  
歸セリ、外ニマタ之ニ類似スル例ニ於テ、其論ノ  
結局ヲ同ウスルモノアリ、格蘭圖トイヘルハ多

千七百六十  
七年印行英譯  
蘭史第一  
卷第二百三十  
葉

千八百三十  
八年印行西歷  
山太爾加異邦  
同配論第三百  
七十七葉ヲ見

年義斯基蒙人ノ中ニ居留セシ人ナルガ、其説ニ  
據レバ、④此蠻民ハ其最高ノ技能トスル海狗ノ  
獵ニ長シ、其技ニ巧妙ナルハ、之ヲ遺傳ニ歸セリ、  
是レ深キ故アリ、何ニトナレバ有名ナル海狗獵  
師ハ子ハ或ハナホ幼ニシテ其父ヲ喪フモ、必ズマ  
タ此技ニ抽ンズレバナリ、此ハ如キハ音ニ身體  
造構ハミナラズ、ナホ智能モ共ニ之ヲ遺傳セシ  
モハナリトイフ、マタ英國ニ於テ傭工ハ手ハ之  
ヲ縉紳ニ比スルニ生レナガテ、ハ既ニ肥大ナ  
リ、⑤而シテ四肢ト頸類トハ相關係スルモノニテ

人祖論 卷三

十四

⑤養動植變  
 遠論第一卷第  
 七十三葉ヲ見  
 ⑥活理學第一  
 卷第四百五十  
 五葉  
 ⑦千八百五十  
 三年印行巴日  
 的外科論第二  
 卷第二百九十  
 葉ヲ見ヨ

屢連發ノ變化ヲ受クルアリ、手足ヲ以テ勞作セ  
 ザル者ハ其顯頰殊ニ薄弱ナリ、故ニ文化ノ人  
 民ハ之ヲ以テ遙カニ蠻民及ビ傭工ノ下ニ出  
 是レ華巴的、士平薩ノイヘル如ク、蠻野ノ人民  
 ハ粗大未烹ハ食物ヲ食シ、以テ多ク顯頰ヲ使用  
 シ、遂ニ其影響ヲ嚙嚼筋骨ニ生シタル所以ナリ、  
 マタ胎兒未ダ分娩セザルノ日ニ在テ、身體諸部  
 ノ中既ニ跖皮最モ堅硬ナルガ如キハ、所謂世  
 カ重壓シタル成果ハ遺傳ニ出ル著明ナルモノ  
 トイフベシ、

⑧水夫ノ遠見  
 距離ハ概シテ  
 陸住ノ者ニ劣  
 レルハ甚ク奇  
 ナリ、額德氏千  
 八百六十九年  
 印行南北戰爭  
 衛生始末第五  
 百三十葉ニ據  
 レバ水夫ノ通  
 例近眼ナルハ  
 其眼界船ノ長  
 サト極ノ高ヤ  
 トニ限レル所  
 以ナリトイフ、  
 ⑨養動植變  
 遠論第一卷第

時計師、刊刻師等ノ中ニ近眼ナル者アリ、マタ生  
 計ヲ戶外ニ送ル者及ビ蠻野ノ人民ニ特ニ遠眼  
 ナル者多シ、是レ普子ク諸人ノ知ル所ナリ、然  
 ノ近眼遠眼ハ概スルニ皆遺傳ニ屬セリ、  
 野ノ人民ヲ以テ之ヲ考フルニ、視官及ビ其他ノ  
 諸官能ニ於テ、歐洲人ノ下劣ナルハ世々之ヲ不  
 使用ニ屬セシ結果ハ遺傳ナルト疑ナシ、嘗テ白  
 人ニノ亞米利加ノ土人中ニ成長シ、マタ其生涯  
 モ之ト共ニ送リシ者アリ、蓮芽ニ適マ之ヲ觀タ  
 ルニ、其人決シテ土人ノ如キ銳利ナル五官ヲ備

八葉ヲ見ヨ  
 ③巴羅圭哺乳  
 類論第八第九  
 節及ミ千八百  
 二十二年印行  
 羅連士生理論  
 第四百四葉ヲ  
 參見セヨ○地  
 郎德孟倫近取  
 ノ原由ハ其人  
 ノ職業ニ在ル  
 諸證ヲ檢出セ  
 リ千八百七十  
 年印行學術雜  
 誌第六百二十  
 五葉

ヘザリシトナリ、且此博物學者ノ説ニ、頭顱ノ中  
 ニ五官ノ機關ヲ統理スル部門アリ、此部門亞米  
 利加ノ土人ニ於テハ大ナルト迥カニ白人ニ超  
 越ストイヘリ、然レバ則チ此諸機關モマタ必ズ  
 強大ナルハ疑ヲ容レズ、貌拉孟拔ノ如キハ、現ニ  
 亞米利加ノ土人ハ頭顱ノ中ニ在テ眞官ヲ統理  
 スル部門ノ頗ル大ニ、其官能モ隨テ強大ナル  
 ヲ有セリトス、巴拉士ニ據レバ、亞細亞北部ノ平  
 原ニ住ム蒙古人種ニ於テ五官ノ健捷ナルモマ  
 タ驚クニ堪ヘタリ、普理加德ハ頭顱ノ幅大ニ

④普理加德人  
 體沿革史ヲ見  
 三、貌拉孟拔ノ  
 説ハ千八百五  
 十一年刊行第  
 一卷第百三十  
 一葉巴拉士ノ  
 説ハ千八百四  
 十四年刊行第  
 四卷第四百七  
 葉ニアリ、  
 ⑤同上第五卷  
 第四百六十三  
 葉ノ引用ニ據  
 ル

顱骨ヲ蓋フニ至ルハ其五官ノ十分ニ暢發セル  
 所以ナリトイヘリ③、  
 客衆亞種族トイヘルハ秘魯ノ高原ニ住ム野人  
 ナリ、亞耳細德獨耳微額尼ノ説ニ據レバ④、此等  
 ハ平生稀薄ナル大氣ヲ呼吸スルヲ以テ其胸膈  
 非常ニ大ナルヲ致セリ、且其肺臟ノ氣房ハ之ヲ  
 白人ニ比スレバ大ニメタ多ナリトイフ、或ハ  
 此説ヲ狐疑スル者アリシガ法耳武斯氏マタ一  
 萬英尺ヨリ一萬五千英尺ニ至ル高地ニ住ム愛  
 馬拉士トイヘル同種ノ者ヲ檢察セシニ、其身體

類論 卷一 十六

千八百七十  
 年印行倫敦人  
 類學社雜誌新  
 編第二卷第百  
 九十三葉ヲ見  
 三

長大ナルハ同氏が曾テ目撃セル人種ノ更ニ  
 及ブベキ所ニ非スト聞ケリ法氏ハ各長ノ基  
 礎ヲ一千ト定メ諸部ノ寸尺ハミナ此基礎ニ據  
 テ之ヲ化セリ其身體檢察表ヲ觀ルニ愛馬拉士  
 人ノ臂ハ之ヲ白人ニ比スレバ太ダ短カク之ヲ  
 黑人ニ比スレバ更ニ太ダ短シ而ノ脛脚マダ太  
 ダ短小ナリ且コヽニ最モ奇異ナル事アリ此愛  
 馬拉士人ハ各大腿ハ脛骨ヨリ殊ニ短小ニメ即  
 チ大腿ト脛骨トハ二百一ノ二百五十二ニ於  
 ケル比例ヲナセリ然レモ同時ニ檢査シタルニ

名ノ白人ノ大腿ト脛骨トハ其比例二百四十四  
 ノ二百三十三ニ於ケルガ如シ同ジク三名ノ黑人  
 ハ二百五十八ノ二百四十一ニ於ケル比例ヲナ  
 セリ而シテ愛馬拉士人ハ上臂骨マダ正肘骨ヨリ  
 短ナリ斯ノ如ク軀幹ニ接續スル部分ハ短縮シ  
 タルハ法耳武斯氏モイヘル如ク軀幹ハ長大ニ  
 至リシ影響ニハ所謂成長上ノ應報ナリ愛馬拉  
 士人ハ其踵ノ微ニ突出スル如ク身體造構ニ於  
 テ更ニ常ニ異ナル所多シ  
 西班牙人嘗テ此等ノ蠻民ヲ東部ノ低地ニ移セシ

人種論 卷二 七

一アリ、方今ト雖モ金砂ヲ淘汰セシメンガ爲ニ、  
 數大俸ヲ以テ之ヲ山下ノ地方ニ呼下スアリ、  
 然レモ此等ハ固ヨリ彼ノ高原ノ風土ニ馴染セ  
 シカバ、山足ニ下リシ後ハ、實ニ其生命ヲ保存ス  
 ル者稀ナリ、法耳武斯氏ハ二代連續シタル家族  
 漸ヤク二三ヲ檢出セシガ、ナホ依然トモ舊ニ仍  
 リ特殊ノ造質ヲ保存セリ、然レモ此特質ノ總シ  
 テ減少セシハ、揆ラズノ明了ナリキ、其身體ハ實  
 際之ヲ揆リシニ、果シテ既ニ減縮シ、ナホ彼ノ高  
 原ニ在ル人民ニ及バザル者トナリタリ、而ノ大

①學士維堅斯  
 ハ山國ニ住ス  
 ル家生動物ノ  
 大ニ其體格ヲ  
 變ゼン所以ヲ  
 論ゼリ(千八百  
 六十九年刊行  
 每週農事雜誌  
 第十號)

腿ノ長ハ少シク増加シタリシガ極メテ其影響  
 ヲ脛骨ニ來タセリ、更ニ精細ナル寸尺ヲ知ラン  
 ト欲セバ、宜シク法耳武斯氏ノ論說ヲ一覽スベ  
 シ、之ヲ要スルニ、高地ニ生息スルト數世ニ及ブ  
 所ハ、必ス其體格ニ遺傳スル變化ヲ致スベキハ  
 分明ナリ、  
 夫レ人類ノ益、體部ヲ使用スルモ、益之ヲ使用セ  
 ガルモ、現今ニ在テハ敢テ此カ爲ニ變化ヲ生ゼ  
 ガルニ似タリト雖モ、以上ニ論ズル實事ニ就テ  
 之ヲ察スレバ、未ダ必ズシモ之ヲ致カハルハ理

由ナシトス、獸類ト雖モマタ然リ、是故ニ太古人  
祖ノ變轉シテ四足類ヨリニ足類ニ遞進セシ際  
所謂天然撰擇ナルモノハ世々體部ハ使用増減ハ  
成果ニ乘ゼシト以テ知ルベシ、

暢發ノ停住ヲ論ズ

暢發ノ停住ト生長ノ停住トハ顯然タル區別アリ、  
暢發ノ停住即チ其不完全ナルモノハナホ生長シテ大  
ヲ加フト雖モ依然トノ前世ノ情狀アリ、即チ種々ノ異常ナルモノ是ナリ、今茲ニ薄額  
的ノ著書<sup>⑤</sup>ヲ援キ、小頭痴子ノ暢發不完全ナル

⑤千八百六十七年刊行小頭痴子傳第五十百二十五百六十九百七十一及七百八十四ヨリ百九十八葉ニ至ルヲ見

腦漿ニ係ル事情ヲ參考セバ、更ニ之ヲ明カニス  
可シ、抑此等ノ痴子ハ頭顱殊ニ微小ニメ、腦漿ノ  
迂曲ハ常人ヨリ更ニ單純ナリ、印堂ハ暢發スト  
雖モ顙頰太ダ突出セリ、故ニ其體裁總テ彼ノ猿  
類ニ符合セル者ナリ、亦カ心能ハ如キハ論ズル  
ニ足ラズ、口アリト雖モ更ニ談話ハ用ヲナスナ  
シ、又暫時モ事物ニ注意スル能ハス、恆ニ他人ハ  
所作ヲハミ、倣似セリ、然レ其性甚ダ亂動ヲ好ミ、  
跳躍ヲ欲シ、作面ヲ樂シ、或ハ葡萄シテ階梯ヲ  
登リ、或ハ欣喜トメ器具ニ駕リ、或ハ踊躍トメ樹

千八百六十三年七月刊行  
 心學雜誌中來  
 國氏ノ說千八百七十年刊行  
 士格的氏韓嘔論第二版第十  
 葉千八百七十一年刊行蒙園  
 禮氏心身論第  
 四十六葉ヨリ  
 第五十一葉及  
 比鹽耳氏ノ  
 說等ヲ見ヨ

木ニ攀ルヲアリ、惟フニマタ童子ノ約テ樹木ニ  
 縁ルヲ以テ一好事トセリ、此ノ如キハ往昔亞耳  
 巴士山ノ山獸ナリシ羔羊ノ小丘ト雖モ好シ  
 之ニ攀躋スルト其情一ナリ痴子ハ風俗カラニ  
 獸類ニ符合スルトコロ多シ喫食ハ際每一口必  
 ズマツ之ヲ檢臭シ、然ル後始メテ之ヲ其口ニ収  
 マリ、一痴子マタ嘗テ半風ヲ狩リテアリシニ數  
 口ヲ以テ手カヲ助ケタリ、其習慣一トノ不潔ニ  
 アラザルハナシ、而シテ心ニ笑止羞耻ハ感覺ナシ、  
 且其身體ハ毛髮ニ雷メルハ載テ書冊ニアリ、  
 ⑤

復古造構ヲ論ズ

茲ニ論述セント欲スル所ノモノハマタ前題ニ  
 屬シテ可ナル性質ヲ存スルモアリ、然レモ身體  
 ノ部分ニ、タトヒ暢發ハ停住シテ不具不完全ナ  
 リ、其部ナホ生長シテ其情全ク同種類中下等  
 ハモハニ於ケル同部ハ體裁ヲ成スモハアリ、是  
 ハ如キハ復古造構トス、何ニトナレバ一種類中  
 下等ニ屬スルモノハ共同祖先ニ接近スルト上  
 等ニ屬スルモノハ一步ヲ占メ、其身體造構更ニ  
 共同祖先ニ密似スレバナリ、然リ而シテ此ノ如キ

向ニ養馴動  
植變進論ニ於  
テハ余マタ婦  
人ノ乳房ノ重  
複セルヲ以テ  
之ヲ復古造構  
トセリ是レ重  
複乳房ノ往々  
胸部ニ規布シ  
マタハ一婦人  
ニ完全ナル單  
一乳房ノ勝部  
ニ存セシ者  
アレバナリ  
然レモ方今  
ニ至リテハ重  
複乳房ノ數脊  
部肘部大腿ノ  
如キ諸部ニ發  
生スルアルヲ  
知レリ千八百  
五十九年印

部分ト雖モ、往昔ナホ斯、ル造構ノ當然ナル祖  
先ニ屬セシ日ニ在テ既ニ其効用ヲ具ヘシハ疑  
ナシ、然ラズンバ焉、生來暢發ノ不完全ナル  
部分ニモ、ナホ益、生長シ以テ遂ニ其効用ヲ全ウ  
スルアルヲ得ンヤ、彼ノ小頭、痴子ノ腦漿ノ單純  
ニハ猿ニ類似スル如キハ、復古造構ノ一例トイ  
フベシ、<sup>⑤</sup>其他更ニ適切ナル數例アリ、一種ノ造  
構ノ如キハ、哺乳類下等ノ生物ニ定存スルモノ  
ニ、而シテマタ數、此哺乳類ノ上等ヲ占ル人類ニ

行、曾禮臣氏啓生戰記第四十五節就中大腿ニ發生セシモノハ殊ニ多量ノ乳液ヲ生ジ以テ嬰兒  
ヲ養育セリ然レバマタ此等ハ復古造構トスベカラザルモノニ似タリト雖モ其實否ラズ何ニ  
トナレバ其例ノ數多ナルヲ偶然ニ付スヘカラザルヲ以テナリ余タゞニ之ヲ傳聞セシノミ  
ナラズナホ數之ヲ實察セリ男子ニモ一對餘ノ乳房ヲ存スル者其數已ニ五名以上ニ及ベリ蓋  
シノマ、<sup>①</sup>一種ハ固ヨリ胸部ニ二對ノ乳房アリ千八百七十二年印行雷堅及例門德合著學術志第三百四葉中學士  
六葉中般地塞德ノ説及千八百七十二年印行雷堅及例門德合著學術志第三百四葉中學士  
德士耳士ノ論文ヲ見ニ澤氏ノ論述セル例ノ一ハ男子ニモ五乳房ヲ存スル者ナリ而シテ其一ハ  
臍上ノ中位ニアリキ察葉耳益達斯米亞ノ説ニ據レバ此中乳房ハ蝙蝠ノ類ニアル中乳房ト同  
物ナリトイフ若シソレ人祖ノ乳房一對ヨリ多カサランニハ男女兩性ニ現出シタル乳房ノ曾  
テ暢發スベキ所以ナキヲ信ゼリ、  
同書中第二卷第十二葉余マタ人類及シテ他ノ動物ニ於テ定規ノ外ニ數多ノ指趾アル者ヲ以  
テ之ヲ復古造構ニ歸セリ蓋シ窩蘊氏ニ據レリ同氏ハ既ハ羽鱷ノ類ニ五指ヨリ多クヲ存セシ  
モノアリトイヘリ且藏の未氏ニ據レバ驚クベシ一人ノ男子手ニ廿五指ト足ニ廿五趾トヲ以  
テ出産セリトイフ抑此等ノ指趾ハタゞニ父祖ノ遺傳ニ係ルノミナラズナホ之ヲ疏除スルノ  
後モ更ニ再生スルヲ恰カモ下等有脊骨動物ニ於ケルガ如シ復古造構タル所以ノモノマタ以  
テ觀ルベシ然レモ現今ハ指趾ノ重複スルモノヲ以テ直ニ之ヲ獸類人祖ニ回復セル復古造構  
ナリトスベカラズ、



現出スルアリ、故ニ若シ其現出スル所ハ、縦ヒ祖  
先ナル獸類ニ在テハ之ヲ當然ナル造構トスベ  
キモ、人類ニアリテハ之ヲ復古造構ナリトス、其  
所以ハ左ニ例ヲ舉ゲ以テ之ヲ説明スベシ、  
蓋シ哺乳類中子宮ニ數種アリ、其二孔二路ヲ具  
有スル複機ナルモノアリ、有袋類ノ如キ是ナリ、  
其内部ニ微細ナル襞痕アルノミニ、全ク單機  
ナルモノアリ、猿類及ビ人類ノ如キ是ナリ、其二  
種ノ情狀ヲ并シ、而メマタ此二生物ノ間ニ存  
スルモノアリ、啞獸類ノ如キ是ナリ、約テ哺乳類

ノ子宮ハ二箇ノ粗管ヨリ暢發シタルモノニテ、  
此管ノ下部ハ角狀管ナリ、學士發耳ニ據レバ、人  
類ノ子宮ハ初メ此二管ノ下部ノ聯合シタルモ  
ノニメ、而シテ此二管ハ子宮ノ暢發スルニ隨テ短  
縮シ、其成ルニ至リテ遂ニ全ク消失セリ、然レド  
胴部之ナキ生物ニ於テハ其聯合シタルモノナ  
シトイフ、マタ子宮ノ角隅漸ク角狀管ニ延及  
セルモノアリ、動モスレバ下等猿類「マ」等ノ  
如キヤ、高等ナル生物ニ至リテモマタ之ヲ發  
見セリ、

婦人ニ例外ナル者往々之アリ、或ハ成年ニ達スルノ後ト雖モ、ナホ子宮ニ角狀管ノ現存シテ其情ヤ、複機ナルモノアリ、窩蘊ニ據レバ、此等ハ咽獸類ノ如ク、二箇ノ角狀管ノ合并シテ一箇トナル、遞進期ヲ再過スルモノナリトイフ、是レ所謂生來暢發ハ不完全ナル機關ニ、ナホ益生長シテ遂ニ其効用ヲ全カスルニ至リシモノナリ、何ニトナレバ、此ヤ、複機ナル子宮ハ、兩部ヨク、胚胎ノ用ヲ成シ以テ、本來ノ任ニ背カザレバ、ナリ、又二箇ノ子宮ノ各孔門ト通路トヲ全備セ

第九千八百五十九年刊行解剖及生理字典第五卷第六百四十二葉中花柳氏ノ論說千八百六十八年刊行窩蘊氏有脊骨動物解剖論第三卷第六百八十七葉千八百六十五年二月刊行墮丁不醫學雜誌中土耳拿氏ノ說等ヲ見ユ

ル真ノ複機ナルモノアリ、此等即チ暢發ノ進度有袋類ニ復セシモノナリ、若シ然ラズバ彼ノ精神ヲ具フルモノ、如ク此二小管分レテ二箇ノ機關トナリ、各完全ナル門路ヲ具ヘ、筋肉神系、肉核、尿管ヲ全クシ、一トハ欠ル所ナキ、ヨク、此ハ如クナル理由ナシ、豈婦人ノ雙造子宮ノゴトキ純然タル復古造構ヲ以テ之ヲ偶然ノ造作ニ歸スルヲ得ンヤ、抑往古ハ失シタル部分ハ更ニ此ハ如ク興復シテ、幾千萬年ヲ經過スル後ト雖モ、ナホ其毫モ上古ハ體裁ニ異ナラザルモ

且論

五五〇

千八百六十七年母の祭博  
 物學社年報第  
 八十三葉ニ嘉  
 氏此論題ニ係  
 リ老里拉德  
 未停的の路連地  
 毛設來領流案  
 等ヲ援キ之ヲ  
 明證セリ安リ  
 ニ余が著書ヲ  
 駁スル者ハ請  
 フ少シク覽ラ  
 垂レヨ、

ハハ復古造構ハ他ニ出デザルナリ、  
 博士嘉禰斯の里内マタ此事ヲ始トメ種々類似  
 ノ諸件ヲ研究シタリシガ遂ニ前條ト結局ヲ同  
 カセリ加之四手類及ビ其他ノ哺乳類ニ於テ顚  
 骨或ハ二箇ノ部分ヨリ成ルモノアルノ例ヲ示  
 セリ○是レ人胚二閱月ニ於ケルノ常情ナリ、然  
 レバ暢發ハ停止スルキハ成年ニ達スルノ後ト  
 雖モ顚骨マタ此ノ如キモノアリ、特ニ顚骨突出  
 セル下等人類ヲ以テ之ヲ常トス、故ニ同氏ハ以  
 爲ラク人類ハ祖先ニ在テハ顚骨固ヨリ二箇ニ

分レテアリシヲ後ニ至リ粘合シテ一トナリシ  
 モハナリト、人類ノ顚骨マタ一箇ヨリ成ルモノ  
 ノ如クナレバ、人胚嬰兒、下等哺乳類等ニ於テハ  
 ミナ縫口アリ、二箇ノ部分ヨリ成ルヲ甚ダ分明  
 ナリ、此縫口ハ人類成年ニ達スルノ後ト雖モ十  
 ホ判然タルモノアリ、而メ其最モ著明ナルモノ  
 ハ今代ニ屬スルモノニアラズ、古代ニ屬スル  
 モノニアリ、特ニ嘉氏ノ説ノ如ク流野ヨリ掘出  
 セシモノニ其形狀前後ハ狭ク左右ニ廣キ頭  
 顚ニアリ、嘉氏マタコ、ニ歸著スル所ノ論點モ

◎以西德饒弗  
禮仙費禮亞不  
正造構論第三  
卷第四百三十

ナホ、顛骨ニ係ル結局ニ於ケルガ如シ、凡ソ此等ノ事件ニ於テ古代人類ハ獸類ニ彷彿タルハ今代人類ノ得テ及ブベキ所ニアラズ、是レ他ナシ生物ノ系譜ニ就テ之ヲ考フレバ、今代人類ハ遠ク夫ハ半人半獸ハ太祖ヲ距リ、古代ハ人類ハ最モ之ニ接近スル所以ナリ、多少此等ニ類似スル不正造構ノ更ニ人類ニ屬スルモノ多シ、ミナ復古造構ノ例トメ諸論者ノ説述ニ係リ一モ疑ヲ容ルベキナシ、是レ此造構ノ從來固有スルハ悉ク哺乳類下等ノ部ニ屬ス

七葉中本旨ニ  
係ル諸例ヲ列  
載セリ、  
◎千八百六十  
八年印行有脊  
骨動物解剖論  
第三卷第三百  
二十三葉

レバナナリ◎  
牙ハ人類ニ於テモ咬嚼ノ爲ニ欠クベカラザル要具ナリ、而シテ窩蘊ノイヘル如ク◎其真ニ獸牙ナル所以ハモハハ形状ニアリ、其形ヤ、鈍頭ナル尖圓ニメ、外側ノ周圍ハ凸形ナリ、内側ノ周圍ハ殆ンド平面ナルアリ、微ニ凹狀ナルアリ、下部ニ少シク突起セル所アルアリ、抑尖圓形ノ著明ナルモノハ瑪拉尼安種族ナリ、就中濠洲人ヲ以テ其最トス、牙ハ門齒ニ比スレバ頗ル深ク、加フルニ堅固ナル牙脚ヲ有セリ、然レド是レハ已ニ人

人祖論 卷三十一 二十五

千八百六十六年刊行形象論綱第二卷第百五十五節

千八百六十四年刊行映譯加爾華類的人類論第百五十一葉ヲ見ヨ

類ハ爲ニ仇敵ノ噬撃スルハ用ヲナサズ故ニ此一箇條ハミヲ以テモ其不具物タルハ明瞭ナリ哈客爾ノ説ノ如ク博ク髑髏ヲ研究スレバ或ハ牙ノ突出シテ全ク列齒ノ外ニ出ルモノアリ而ノ此ノ如キ者ニ於テハ必ズマタ下顚ノ齒間ニ上顚ノ牙ヲ納ルニ宜シキ空處アリ上顚ノ齒間ニ下顚ノ牙ヲ納ルニヨロシキ餘地アリ相互ニ之ヲ收納スル此ノ如シ嘗テ和愚奈ノ圖説ニ係ル蓋非人ノ髑髏ニ於テ見タル此齒間ノ空處ハ其廣濶ナル驚クニ堪ヘタリ

千八百六十七年刊行人類學評論第百九十五葉中加得伯禮格納例約ヨリノ顚骨ニ係ル論及ビ

千八百六十八年刊行同評論第四百二十六葉中書方仙ノ說等ヲ見ヨ

代ノ髑髏ト今代ノ髑髏トヲ比較スルニ古代ノ髑髏ニ牙ノ頗ル抽出スルモノ既ニ三個ニ及ベリ殊ニ納列的ヨリノ顚骨ニ於テ非常ナリトス然レ女性ヲ及ビ女性ヲラングニ牙ノ外ニ突出スルモノアリ人類中ニモ或ハ婦人ニ然ルモアリト雖モ似人猿類ニ於テハ獨リ男性ノ牙ノミ全ク暢發セリ故ニ男子ハ牙ハ暢發完全ナルハ殊ニ猿樣高祖ニ似タリトス人類ノ之ヲ現有スルハ即チ祖先ハ斯ハル兵器ヲ所持セシ所

八祖論 卷二 三六

○千八百四十  
四年印行容貌  
解剖論第百十  
第百三十一葉

以ナリ、然リト雖モ、人自カラ此ノ如キ牙ヲ有シ、  
マタ他人ノ之ヲ存スルヲ知リ、而メナホ此説ヲ  
排斥シテ容レザル者アリ、ソレ自カラ之ヲ排斥  
シテ其由緒ヲ蓋ハントスルハ自カラ其由緒ヲ  
明示スル所以ナリ、牙ハ人類ニ在テ既ニ兵器ノ  
用ヲ成サズ、マタ之ヲ成サシムルノ勢ヒナシト  
雖モ、查爾斯、白爾君ノイヘル<sup>○</sup>憤激筋ナルモノ  
ヲメ偶然縮結セシメ、以テ之ヲ顯ハシ、隙ヲ狙フ  
テ咬撃セントスルアルハ、其狀恰カモ、犬狗ハ將  
ニ戰ハントシテ備ハタルが如シ、

○千八百六十  
七年刊行博物  
學社年報第九  
十葉中博士嘉  
彌斯の里内ノ  
引證ニ據ル

四手類、マ、ハ他ハ、哺乳類ニ固屬スル筋ハ、屢人  
類ニ暢發スルモノハ、アリ、博士未刺格比屈<sup>○</sup>四十  
人ノ男子ヲ檢察セシニ、其十九人ハ同氏が名ツ  
ケテ臀骨筋トイヘル一種ノ異筋ヲ有シ、他ノ三  
人ハ之ニ易フルニ交節筋ヲ以テシ、殘ル十八人  
ハ少シモ其形跡ヲ存スル者ナカリケリ、マタ女  
子三十人ノ中ニテ此筋ノ兩脇ニ暢發シタルハ  
タゞニ二人ナリシガ、外ニ不暢發ナル交節筋ヲ  
存スル者三人ナリキ、然レバナタ此筋ヲ存スル  
者ハ婦人ヨリモ男子ニ多シトス、而メ人類ハ獸

人祖論 卷二

④千八百六十  
 五年刊行學士  
 會院雜誌第十  
 四卷第三百七  
 十九第三百八  
 十四葉同六十  
 六年刊行同第  
 十五卷第二百  
 四十一同四十  
 二葉同六十七  
 年刊行同第十

類ヨリ出シ所以ヲ考フレバ更ニ之ヲ詳カニセ  
 リ何ニトナレバ此筋多ク獸類ニ在リ且之ニ在  
 テハ專ラ男性ハ爲ニ生殖事件ヲ大成スレハナ  
 リ

鳥德氏嘗テ論說數編ヲ以テ講究セシガ④人類  
 ハ變筋ハ獸類固有ハ筋ニ類似スルモノハ其數甚  
 ダ多シ然レハ人類最近ハ戚族ナル四手類固有  
 ハモノハニ類似スル變筋ニ至リテハ更ニ多雜ニ  
 マコハニ其大別ヲ示スモ得テ難シトス例ハバ  
 身體健剛ニメ頭顱完全ナル一人ノ男子ニ七筋

五卷第五百四  
 十四葉同六十  
 八年刊行同第  
 十六卷第五百  
 廿四葉ヲ見ヨ  
 マタ千八百六  
 十九年刊行動  
 物學社報告第  
 二卷第九十六  
 葉ニ護里氏ノ  
 說アリ  
 ④千八百六十  
 八年印行陵爾  
 蘭學術院報告  
 第十卷第百廿  
 四葉中麥嘉理  
 斯得氏ノ說ヲ

有餘ノ變筋アリ而メ此等ハミナ諸種ハ猿類ニ  
 固有スルモノナリ且此男子ノ左右ノ頸側ニ強  
 大ニメ純然タル鎖柱骨起筋アリ是レマタ猿類  
 ニ定存スルモノハニテ人類ニ於テハ大略六十人  
 中一人ハ必ズ之ヲ存セリ④又此男子ニ第五指  
 ノ蹠骨ノ縮埋筋アリ此筋ハ哈屈禮普拉華等ノ  
 諸氏ニ據レバ高等下等ヲ論セス普子ク猿類ニ  
 存スルモノハナリトイフナホニ箇條ノコニ述  
 フベキモノアリ肩胛基筋ハ全ク猿類以下ハ哺  
 乳類ニ屬シ而メ四足ヲ以テ歩行スルモノニノ

人祖論 卷二

三六〇

見天  
 ①千八百七十一年十一月刊行解剖及性理雜誌第七十八葉中修布尼氏ノ説ヲ見ヨ  
 ②千八百七十二年五月刊行同上第四百廿一葉  
 ③同上第百二十一葉中博士麥嘉理斯得ニ據レバ變筋ノ多キハ手背ヲ第一トシ面部

ミ限レルガ如シ<sup>①</sup>而ルニマタ六十人中一人ハ必ズ之ヲ存セリ、魏德禮氏ハ人類ノ兩足ニ第五趾蹠骨外轉筋ヲ發見シタリ<sup>②</sup>此筋ハ當時ニ至ルマデ人類ニ之ナキモノトセシガ似人猿類ニハ固ヨリ存スル所ナリ、夫レ手ト足トハ人類ニ於ケル特殊ノ造構ナリト雖モ、其筋非常ニ變化シテヨク獸類ニ於ケル同種ノ筋ニ類似セリ<sup>③</sup>然ノ其類似スルモノニ完全ナルアリ、不完全ナルアリ、不完全ナルハ現ニ遞進ニ際セシモノナリ、マタ其理ハ未ダ之ヲ詳カニセザレバ變化

④第二トシ脚足ヲ第三トス  
 ⑤千八百六十四年六月廿七日印行愛爾蘭學術院報告第七百十五葉中學者兼神學士方東ノ説及ビ同誌第十卷第百三十八葉中博士麥嘉理斯得ノ説ヲ參考セヨ  
 ⑥本書初版既成ノ後千八百七十一年理學

ノ男性ニ常ナルモノアリ、女性ニ常ナルモノアリ、烏德氏ハ筋造構ノ通規ニ戻ルモノト雖モ、未詳ハ原由アリテミナ之ヲ一定ノ方向ニ由ラシメタリ、是レ解剖學ヲ修メント欲スル者ハ宜シク研究セザルベカラザル要件ナリトイヘリ<sup>④</sup>  
 蓋シコ、ニイフ未詳ハ原由トハ所謂上古ノ體裁ニ復セントスル復古造構ナルヤソレ甚ダ明カナリ<sup>⑤</sup>苟モ人猿生發ヲ相同ウスルニ非ンバ、一人ニメ偶然猿類ニ類似スル筋筋ノ七個有餘

人祖論 卷二

三九



雜誌中人類ノ  
頸肩胸筋ノ變  
化ニ係ル鳥德  
氏ノ論文ヲ得  
タルニ其論悉  
ク余ガ説ヲ證  
明セリ

ニ及ブベキ所以ナシ、マターノ論點ヨリ之ヲ考  
フレバ、猿類ヨリ出シ人類ニシテ、縦ヒ幾千萬世ヲ  
經過スルニ、彼ノ馬、驢、騾ノ數千世ヲ隔テタル後  
ニ、黒條ノ突然肩脚ニ再發スル如ク、肌筋等ハモ  
ハ驟カニ再生不可ラザルヲ保ツ能ハス、  
本條ニ論述スル復古造構ノ諸例ハ、第一卷中ニ  
論ゼシ所ノ不具ナル機關ノ例ニ等シキモノニ  
テ、此ヲ彼條下ニ述べ、彼ヲ此條中ニ論ズルモ肯  
テ不當ナリトスベカラザルモノ多シ、譬ヘバ人  
類ノ子宮ノ角狀管ヲ有スルモノハ、哺乳類中或

種ノ固有スル子宮ニ異ナラザルモノニシテ、タゞ  
彼ニ在テハ暢發完全ナリトスルモ、此ニ在テハ  
其不完全ナルモノ即チ復古造構トスルガ如シ、  
マタ人類一般ニ定存スル男子ノ乳房ノ如キ機  
關アリ、男女ニ通屬スル尾龍骨ノ如キモノアリ、  
此等ハ正シキ不具ノ造構ナリ、然レバ腋窩上孔  
ノ如キ人類一般ニ之ナキモノハ即チ復古造構  
ノ部ニ屬セシムベキモノナリ、復古造構及ビ不  
具ノ造構ハ實ニ人類ノ獸類ヨリ出シ、確證トイ  
フベシ、

連發變化ヲ論ズ

人體造構ハナホ獸體造構ノ如ク、彼此ノ部分屢  
密接ノ關係ヲ有セリ、故ニ甲部變ズルキハ乙部  
必ズマタ變ズルアリ、然リト雖モ是レ敢テ甲部  
ノ乙部ヲ管理スル所以ニアラズ、マタ甲乙二部  
共ニ或ル先ダツテ暢發セル部分ノ爲ニ管理セ  
ラル、所以ニアラズ、蓋シ何如ノ理由ヲ以テ然  
ルヤ往々其所以ヲ詳カニセザルモノアリ、饒弗  
禮ノ主張スル如ク、種々ノ怪異ナル不具ノ部分  
ハ即チ此ノ關係ヲ有スルモノニ似タリ、且偶匹ノ

●本旨ニ係ル  
證據ハ養剛動  
植變進論第二  
卷第三百二十  
葉及ヒ第三百  
三十五葉ニ出  
ズ

造構ニ於テハ變化殊ニ連發セリ、密業耳嘗テイ  
ヘルアリ、手筋ノ變化シテ正法ニ戾ルモノハ必  
ズ常ニ足筋ニ類似シ、足筋ノ變以テ常ニ異ナル  
モノハマタ果シテ手筋ニ符合セリト、視官ト聽  
官トノ如ク、齒ト髮トノ如ク、皮色ト髮色トノ如  
ク、血色ト資質トノ如キモノハ多少連發變化ヲ  
ナセリ、○マタ博士書方仙ハ下等人種ニ特別ナ  
ル一種ノ筋絡ト眉稜ト相關係スルトコホアル  
所以ヲ檢出セリ、

偶然變化ヲ論ズ

八

論

三十一

養動植變進論第二卷第二十三編ニ究論セリ

前條中ニ屬スベキ諸變化ノ外ニナホ偶然變化トイフベキ一大種ノ變化アリ、是レ人智ノ未ダ及バザルニヤ其歸スベキ原由ヲ詳カニセス、然レ此等ノ變化ハタトヒ各自一個ノ小異ヲ生ズルニ身體造構ノ點然タル大異ヲ致スニ主トシテ、百體構成ノ資質ニ由リ、加フルニ從來經歷セハ境遇ノ影響ヲ帶ブルト太ダ明カナリ

人口増殖ノ度ヲ論ズ

附人口増殖ノ妨害ヲ論ズ

合衆國ノ如キ文化ノ人民ハ二十有五年ニノ其

千八百二十六年印行上帝道博士馬爾沙斯氏口論第一卷第六葉及第七葉五百十七葉ヲ見ヨ

人口ヲ倍ストイヒ、マタ歐拉ノ計算ニ據レバ纔カニ十有二年餘ニシテ之ヲ倍セリトイフ然レバ則チ合衆國ノ現人口ヲ以テ三千万人ト看做シ、始ノ計算ニ據ルニ六百五十七年ヲ經バ、此人口増殖シテ地球ハ水陸全面ヲ包晷シ方三英尺ノ地ニ四人ハ人員ヲ容レザルヲ得ザルニ至ルベシ、然レドコ、ニマタ種々ナル妨害アリ、彼ハ生計ヲ聊シ安寧ヲ享クルハ難事ナルガ如キハ最モ普通ノ大害ナリ、其然ル所以ハ之ヲ合衆國ニ徵セリ、本國ハ生計容易ニメ而シテ土地廣大ナ

リ、故ニ人口陸續トシテ増殖セリ、若シ英國ニ於テ  
モ此等ノ便宜ノ突然倍スルコトアラバ、人口モ隨  
テ倍スルニ至ルベキナリ、開明ノ國ニ結婚ハ制  
度アルト、窮民社會ニ嬰兒ハ死數ハ非常ナルト、  
敗宅荒屋ニ群居スル者ハ諸病ニ罹リ古今死凶  
ハ夥多ナルトハ、マタミナ與カリテ妨害トナル  
者ナリ、但シ天災、兵革、流行病等ノ爲ニ一時國民  
ノ人口ヲ減損スルコトアリ、其境遇ノ好適シタ  
ランニハ久シキヲ出ズシテ之ヲ平均シ、動モス  
レバ却テ以前ニ超越スルコトアルベシ、人民移轉

ハ多キモ一時ノ妨害ヲナセリ、然レデ居テ移ス  
如キ者ハ之ヲ要スルニ窮民ナリ、故ニマタ其結  
果ヲ見ザルモアリ、  
抑生殖力ハ文化ノ人民ヨリモ野蠻ノ人民ニ少  
シトノ説ハ、馬爾沙斯ナドモ謂ヘル如ク、大ニ疑  
シキ事ナリ、此一條ニ係リテハ殆ンドイフベキ  
所ヲ知ラズ、蠻民ノ如キハ人口ヲ調査セシコトナ  
キヲ以テ殊ニ之ヲ知ルニ由ナシ、然レデ宣教師  
其他蠻民中ニ居留セシ者ノ傳説ニ據ルニ、蠻民  
ノ家族ハ大勢ナル者甚ダ稀ニ約子ミナ小勢

ナリ、其故ハ婦人ノ幼穉ヲ乳養スル時間ノ長キ  
ヲ以テモ之ヲ推知スルニ足レリ、マタ一説ニハ、  
蠻野ノ人民ハ數艱難辛苦ヲ經、加フルニ文明人  
民ノ如ク滋養物ヲ食バザルヲ以テ生殖力ニ乏  
シキ所アリトイヘリ、是レソレ或ハ是ナランカ、  
余既ニ之ヲ養馴動植變進論ニ講究シタリシガ  
⑤、家生禽獸草木ハ野生同種類ニ比スレバ總テ  
速カニ繁殖セリ、動モスレバ禽獸忽然其食ニ富  
ミ以テ肥大ヲ致シ、或ハ草木卒然瘠土ヨリ肥地  
ニ移リ以テ豊生スルアリト雖モ、是レ敢テ家生

養馴動植變進論第二卷第百一葉ヨリ同十三葉ニ至リ及び第百六十三葉ヲ見ヨ

動植物ノ繁殖ノ野生物ニ勝ル理由ニ反セザル  
者ナリ、是故ニ開明ノ人民ハ所謂養馴ノ至リシ  
者ニテ、之ヲ野蠻ノ人民ニ比スレバ或ハ多生ナ  
ルニ近シ、且開明セル人民ノ益、繁生スルハ家生  
動物ノ如ク遺留性質トナリタル者ニ似タリ、人  
類ニ双子ヲ産スルノ例多ク系統ヲ傳フルノ勢  
アルハ以テ觀ルベキナリ⑥、  
蠻野ノ人民ハ縱ヒ其生殖力ヲ以テ開明ノ人民  
ニ如カザル所アリ、敢テ之ヲ抑壓シテ其妨害  
ヲ加フルニ非レバ、其増殖ノ急カナル可キハマ

千八百六十三年七月印行 設日維基氏中外 百七十葉ヲ見

◎千八百六十八年印行翰太氏便加爾在留日記第二百五十八葉

タ疑ナシ、其證ハ之ヲ山太來トイフ印度山中ノ民族ニ徵セリ、此民族ハ翰太氏ノ説ニ據ルニ◎近來種痘ヲ導キ、時疫ヲ豫防シ、交戦ヲ廢止セシガ其以降人口増殖ノ急カナリシハ非常ニ出デタリ、然レデ此野人近隣ノ地方ニ散移シ以テ傭工ヲ勉メシニ非ンバ、或ハ然ラザリシモ未ダ知ルベカラズ、マタ野蠻ノ人民ハ配偶ヲ以テ常トセリ、然リト雖モ其俗ニマタ自カラ制限ノアルアリテ猥リニ結婚ノ早キヲ競フニアラズ、凡ソ若年ノ男子ハ妻ヲ求ムルニ方テマヅ之ヲ扶持

シ能フベキ所以ヲ明證セザルヲ得ズ、而メ女子ヲ其父母ニ購フニ若干金ヲ要セリ、故ニ之ヲ籌策スルハ其第一歩ナリ、且蠻民ハ飢饉災殃ノ爲ニ族ヲ擧テ禍ヲ被ルアリ、是レ其生計ヲ聊ハズルハ難キハ直接ニ人口ヲ制限シ開否ハ人民日ヲ同カシテ語ルベカラザル所以ナリ、然リ而メ其一旦飢饉ニ際スレバ止ヲ得ズ粗物ヲ食スルニ至リ、勢トモ健康ヲ害セザルナシ、飢饉中胃腑ノ凸出シ、四肢ノ衰瘠セル等ニ係ル事多ク諸種ノ紙上ニ見ヘタリ、而メ此ノ如キ時節ニ方テハ

自然四方ニ漂遊スルコトアリ、因テマタ小兒ノ死  
ヲ致ス者多シ、此等ノ件ハ余ガ已ニ濠洲人ニ就  
テ實察スル所ナリ、然ノ飢饉ノ來ルヤ略定期ア  
リ、加之概子季候ノ非常ナルニ因レリ、故ニ諸蠻  
必ズ人口減殺ヲ免カレズ、マタ食物ハ獨リ人爲  
ヲ以テ生作スベカラザレバ、蠻民ノ人口ハ連綿  
増殖スベキ所以ナシ、且飢渴ノ極ニ達シ危急且  
タニ迫ルルハ他ノ所領ヲ侵掠シ、以テ死傷ヲ受  
クル者其數知ルベカラズ、蠻民ハ固ヨリ近隣ノ  
種族ト相争ヒ殆ンド一日ノ間斷ナシ、而ルニコ

、ニ至リ更ニ其甚ダシキヲ致セリ、マタ或ハ食  
ヲ深山窮海ニ覓メ、數災害ヲ招クアリ、或ハ猛獸  
ノ爲ニ難ヲ被ルアリ、印度ノ如キニ於テハ往々  
兇虎ノ爲ニ惱マサレ、人民悉ク凶失セシ地方モ  
アリ、

馬爾沙斯マタ此等ノ妨害ニ論及セシガ、此問題  
ニ關シ最モ緊要ナル墮胎、殺兒、特ニ殺女兒ノ結  
果ハ之ヲ忽視セシ者ノ如シ、抑馬格達南氏ガ<sup>⑤</sup>  
論ズル如ク往古ハ墮胎、殺兒ノ惡習特ニ熾シナ  
リ、而メ方今ト雖モナホ其存スル處アリ、熟此惡

◎千八百六十  
五年刊行、上古  
結婚志

◎游觀新聞子  
 八百七十一年  
 三月十二日第  
 三百二十葉ニ  
 一記者アリ此  
 章句ヲ評スル  
 一左ノ如シ  
 馳頓氏ハマダ  
 新クニ人類犯  
 罪ノ宗則ヲ設  
 立セリ其所以  
 ハ蓋シ高等獸  
 類ノ稟性ヲ以  
 テ遙カニ下等  
 人類ノ習性ニ  
 卓越スルモノ  
 トナシ而シテ

習ノ由テ來リシ原由ヲ按ズルニ是レ野蠻ハ人  
 民盡ク所出ハ嬰兒ヲ養育スルハ難キヲ認メタ  
 ル所以ナリ彼ノ淫風汚業ノ盛ンナルモマダ人  
 口繁殖ノ妨害ヲナセリ但シ此等ノ如キハ必ズ  
 シモ生計ノ立タザルニ出ルモノニ非レド或ハ  
 人口繁殖ヲ防クノ一端トノ行ナハル、處ナキ  
 ニシモ非ルナリ、  
 速ク上古ニ溯リ之ヲ考フルニ、人類ノ品位未ダ  
 今日ノ如キニ至ラザリシ片ハ、其進退舉止トモ  
 道理ニ基カザルハ遙カニ今世最下ノ蠻民ニ下

民ノ惡習トイ  
 係ルモノ、如  
 ナリ以テ之ヲ  
 考フレバ一旦  
 人類ノ知識ヲ  
 得シハ永ク徳  
 行ノ衰退ヲ致  
 セシ所以ナリ  
 トセルハ名ハ  
 學術上ノ論說  
 ナリト雖モ實  
 人知ラズ識ラ  
 不基督教ノ體  
 裁ニ法リ再  
 世ニ一派ノ宗  
 教ヲ新立セル

リ、而シテ專ラ其本性ニ由ルハ遠ク其及バザル所  
 ナリ、故ニ半ハ半獸ハ太祖ハ殺兒多配ハ惡習ナ  
 カリシ者ナリ是レ獸類ハ本性ハ未ダ曾テ我産  
 生スル嬰兒ヲ殺棄スルニ至リシ者ナク、マダ嫉  
 妬ハ念ハ欠乏シテ猜疑ハ心ナキ者ヲ見ザレバ  
 ハリ、而シテ其俗ニ敢テ結婚ノ制限アルニ非レ  
 バ年齒ナホ早シト雖モ男女意ニ任セテ配偶ス  
 ルヲ得シ者ナレバ、人祖ノ繁殖セシハ必然神速  
 ナリシト疑ナシ、然リト雖モ或ハ定期ハ妨害ア  
 リ、或ハ平時ハ妨害アリ、以テ其人口ヲ損込セシ

人祖論 卷二 三七〇



ニスギザレバ  
ナリ、ソレ人類  
ノ初ノ良心ノ  
戒メヲ犯シ禁  
戒メヲ食シ爲ニ  
知識ヲ得シハ  
即チ德行ノ永  
衰セシ所以ナ  
リトスル階次  
ノ傳言モ豈コ  
ノニ止ラザラ  
ンヤ、

ハ今時ノ蠻民ニ於ケルノ類ニアラザルベシ、然  
リ而メ此妨害ノ詳細ハ得テ知ルベカラズト雖  
モ、ナホ諸動物ノ急カニ増殖セザル事由ノ得テ  
解スベカラザルト其理一ナリ、牛馬豕羊ノ如キ  
ハ非常ニ繁生スベキ動物ニ非レバ、南亞米利加  
ニ於テ嘗テ始テ之ヲ放飼セシ際、其繁殖ノ急カ  
ナリシハ實ニ驚クニ堪ヘタリ、象ハ動物全種類  
中増殖ノ最モ遅緩ナル者ナレバ、若シ此ノ如ク  
セバ數千年ヲ出ズシテ必ズ全地球ヲ掩フニ至  
ルベシ、猿類各種ノ増殖モマタ幾多クカ妨害ヲ

蒙リシハ必定ナリ、然レバ貌廉ノイヘル如ク此  
等ハ敢テ賊獸ノ爲ニ爪掠セラレシト等ハ之ナ  
キ者ノ如シ、マタ亞米利加ノ野馬及ビ家畜ノ如  
キハ始ノ其生殖力ノ増加セシヲモ見タル者ナ  
ク、而ノ已ニ繁殖セシ後ニ及ビテハ其減略セル  
ヲモ知ル者ナシ、然リト雖モマタ敢テ増殖ノ妨  
害ヲ免カレシ者ニアラズ、總シテ生物ハ何種ヲ  
問ハズ多少此妨害ヲ蒙リ、而メ其境遇ヲ異ニス  
レバ隨テ妨害ハ性質ヲ異ニセシハ明カナリ、彼  
ノ時侯ノ不順ナルニ由テ定期ノ死失アル如キ

ハ所謂妨害中ノ妨害タリ、上古人類ハ祖先モ、  
カ此患ヲ免ルベカラザリシ者ナリ、

天然撰擇ヲ論ズ

人類ハ心身ニ變化アリ、而シテ此變化ハ或ハ直接  
或ハ間接ナルモ、須ラク生物普通ノ原因ヨリシ  
生物普通ハ規則ニ遵ヒ、決メ人獸ハ間ニ異ナル  
ナキ所以ハ既ニ之ヲ明子セリ、實ニ人類ハ廣ク  
地球上ニ散布スレバ、其反覆移轉ノ際無窮ノ事  
情ニ遭遇セサルヲ得ズ、<sup>⑤</sup>一半球ニ於テ提拉得  
休、吳喜望峯、打斯馬尼亞ノ住人ノ如ク、他ノ半球

◎千八百六十  
九年印行、天地  
間雜誌第二  
三十一葉中、  
端禮日盆ノ説  
ヲ見ユ

◎千八百五十  
一年印行、拉撒  
人類轉徙考第  
百三十五葉ヲ  
見ユ

ニ於テ北極地方ノ居民ノ如キハ種々ノ氣候ヲ  
經、居處ヲ移セシ、何回ニモ今日占據スル家宅  
ニ達セシヤハ得テ知ルベカラズ、<sup>⑥</sup>且人類ハ祖  
先ハ諸動物ノ如ク急カニ繁殖シ、居然生計ヲ聊  
ンズル能ハザルニ至リシ下疑ナシ、故ニマタ營  
生ノ争鬪ヲ起シ、遂ニ天然ノ撰擇ニ馴致シ、爲ニ  
身體ノ有害ナル部分ハ愈々變化シテ凶失シ、有益  
ナル部分ハ愈々變化シテ遷進スルノ情勢ヲ成セ  
リ、但シ此等ハ身體造構ノ多年ニ出デタル大件  
ノ變化ヲイフニアラス、専ラ各自ハ小異ヲイハ

④千八百六十  
 九年印行動物  
 學社報告第七  
 卷第九十六葉  
 ヲリ同九十八  
 葉ニ至リ謀里  
 英發的二氏、  
 説ヲ見ヨ、

リ、即チ人類ハ活動力ハ屬スル所ナル手筋足筋  
 ハ、ナホ獸類ニ於ケルト同シク、常時變轉シテ止  
 マザル者ハ如キ是ナリ、故ニ例ヘバコ、ニ人  
 類ノ祖先アリ、殊ニ事情ノ變轉スル一地方ニ住  
 居セリ、若シ之ヲ等分シテ二群トナシ、而シテ其  
 群ハ活動力ノ無雙ナルヲ以テ或ハヨク衣食ヲ  
 覓メ、或ハヨク外敵ヲ防クニ適セル者ヨリ成リ、  
 他ノ一群ハ否ザル者ヨリナルトシタランニハ、  
 則チ此優等ナル一群ハ之ヲ他ハ萬事ニ不適當  
 ナル者ヨリ成ル一群ニ比スレバ、一旦事アルニ

臨ンデ生殘スル者更ニ多ク、而シテ其子孫ノ繁榮  
 スルモ、マタサラニ急カナルベシ、

人類ノ萬物ニ靈タル所以ヲ論ズ

人類ハ縱ヒ方今野蠻ヲ以テ目セラル、者ト雖  
 モ曾テ地球上ニ現出シタル生物ノ最高ナル者  
 ニ、其居處ノ廣大ナルハ他ノ高等動物ト雖モ  
 及ブベキ所ニ非ズ、人跡ノ通ズルトコロ獸類其  
 跡ヲ絶テリ、蓋シ人類ハ人類ノ所以ハヨク心  
 能ヲ具シ、知識ヲ進メ、ヨク仁義ヲ識リ、緩急相助  
 ケ、ヨク靈體ヲ有シ、妙用ヲ備フルニアリ、彼此和

且論 卷二 四十一

一千八百七十  
 年十月印行此  
 評論第二頁  
 九十五葉天撰  
 際限

講シ卒ニ營生戰ヲ止メシ如キハ即チ以テ之  
 ヲ徴スルニ足レリ且人類ハ清亮ナル言語ヲ表  
 出セシハ心能ノ至大至妙ナル所以ニ人而人  
 類開進ノ斯ハ驚クベキヲ致セシハ抑々言語  
 ノ効用窮リナキ所以ナリ查運西來的氏曰ク  
 心理學ニ由テ言語ハ心能ヲ分析スルニ少シク  
 之ヲ進ムルハ大ニ他件ヲ進ムルヨリ更ニ腦力  
 ヲ要セリトマタ人類ハ各種ハ兵器器具機檻等  
 ハ發明シ以テ其身體ヲ保護シ以テ禽獸ヲ狩獲  
 シ以テ食物ヲ占有スルヲ得タリ木舟槳楫ヲ創

作シ以テ漁シ以テ航シ以テ近隣膏腴ノ島嶼ニ  
 移轉スルヲ得タリ火ヲ生ズルハ術ヲ發見シ以  
 テ堅硬多網ナル草根ヲノ食化シ易カラシメ有  
 毒ナル菓實ヲノ害ナカラシムルヲ得タリ凡ソ  
 言語ヲ除クノ他ニ曾テ人類ハ成シ得タル最大  
 ナル功業トイフベキ此生火ハ術ハ發見モ實ニ  
 有史以前ニ在リ夫レ未タ蠻野ハ俗ヲ脱セザル  
 人類ニハ既ニ斯ハ如キ緊要ナル諸般ハ發明ア  
 ルハ是レ豈視察力記臆力好奇性想像力道理心  
 ノ暢發セシ現象ナリト云ハザルヲ得ンヤ然レ

祖論

卷二

四十一

千八百六十  
 九年印行四季  
 評論第三百九  
 十二葉○千八  
 百七十年印行  
 和禮士氏天撰  
 論中コ、ニ論  
 及シ而ノ本書  
 ニ引用スル論  
 文ハ悉ク之ヲ  
 其書ニ登錄セ  
 リ

然レテ彼ノ和禮士氏ガ天然ノ撰擇ハ蠻民ノ  
 腦漿ヲノ猿類ノ腦漿ニ彷彿タルヲ得セシムル  
 ニスギズトスル所以ヲ解セズ、  
 人體造構ノ妙用ヲ論ズ  
 才徳ハ人類ニ賦與スル至高ハ品性ナリ、然リト  
 雖モ身體ノ妙用ヲ備フルハマタ肯テ一步モ之  
 ニ讓ルベキ所ニアラズ、是ヨリ以下專ラ其所以  
 ラ討論シ、而ノ才徳ニ係ル議論ハ暫ラク之ヲ下  
 編ニ讓ル、  
 假令打槌ト雖モ之ニ精達セント欲スレバ其事

千八百六十  
 九年二月印行  
 德伯林四季醫  
 學雜誌中老遜  
 洋的氏天撰法  
 ノ引用ニ據ル  
 ○學士容刺モ  
 一々之ヲ引用  
 セリ、

決ノ容易ノ業ニアラズ、苟モ工匠ノ道ニ從事セ  
 シ者ハミナ之ヲ知レリ、彼ノ非地人ノ如ク敵ヲ  
 禦キ、又ハ鳥ヲ獲ント欲シテ之ヲ正鵠トナシ、以  
 テ石ヲ放チ百發百中シテ一失ナキヲ致スハ、是  
 ハ手臂、肩筋及ビ銳利ナル觸官ハ協合シタル能  
 カヲ要セリ、然ノ石ヲ放チ鎗ヲ投ゲ若クハ其他  
 ノ事ヲ做スモ、其人マヅ正立セザルベカラズ、是  
 ハ更ニ諸筋ハ協カヲ要スル所ナリ、マタ鑑定ノ  
 名審司ナル斯屈爾格拉弗的氏ノイヘル如ク、  
 石刀石鏃ノ工作モ上古人民ノ非常ナル巧術ト

人且論 卷二 四十二

積年ノ習熟トヲ窺ヒ觀ルニ足レリ故ニ火石ヲ以テ粗器ヲ作り骨片ヲ以テ鎌鉤ヲ製スルモノトハ用手ノ術ヲ要セザルナシ然リ而ノ上古ノ人民各ミナ火石器具ヲ作り粗瓶ヲ製セシ者ニアラズ既ニ分業ヲ施行シタゞ其中若干人員ノミ專ラ此ニ從事シ自餘ノ者ハ其狩獲スル所ヲ以テ之ト交易セシモノ、如キモマタ彼ノ工作ハ習熟ヲ要スル所以ヲ明カニセリ方今古物學者ノ信ズル所ニ據リテモ人類ノ祖先ガ火石ノ裂片ヲ礪磨シテ器具ヲ成スニ至リシハ計ルベ

カラザル年數ヲ經過セルモノトス夫レ石ヲ投テ正鵠ヲ失セズ石片ヲ以テ器具ヲ成ス如キ手臂ハ妙用ヲ具フル人様獸類ハ單ニ工術ノ一點ヨリ之ヲ論ズルトモマタヨク習熟ニヨラバ凡ソ開明人民ノ造製スル物品ハ約子之ヲ作製シ得ベカラザルノ所以ナシ例ヘバ手臂ハナホ發音機關ノゴトシ此機關ノ猿類ニ於ケルハ種々ナル號鳴ヲ發シテ報知ヲ通ジ若クハ音樂ノ調子ニ諧ヘル音聲ヲ發スルガ如キニ止レリ然レバ其人類ニ於ケルハ造構ニ異ナルトコロナシ

高嶺有脊骨  
動物解剖論第  
三卷第七十一  
葉ヲ見ヨ

ト雖モ、世々使用シタル成果ハ遺傳ニ由テ正シ  
キ言語ヲ發スルヲ得ルナリ、  
サテ人類ノ最近ナル戚族ニシテ、而シテ人祖ノ肖像  
ニ密似スル四手類ノ手ヲ觀ルニ、其造構一モ人  
類ニ異ナルトコロナシ、タゞ其用ニ限リアルノ  
ミ、且其行動ニ利便ナラザルハ、迥カニ狗足ニ劣  
レリ、シンプンヅン<sup>1</sup>、ララン<sup>2</sup>等ハ行クニ掌邊若  
クハ指節ヲ以テセリ、以テ知ルベシ<sup>3</sup>、然レド木  
ニ攀ルガ如キニ至リテハ一方ノ大指ト一方ノ  
指掌トヲ以テセリ、其情宛カモ人類ノ然ルニ異

ナラズ、タタ或ハ罽餅ノ細頸ヲ以テ之ヲ口ニ致  
スガ如ク重物ヲ揚搬スルアリ、或ハ大猴ニ手ヲ  
以テ石ヲ反轉スルアリ、或ハ樹根ヲ穿ツアリ、或  
ハ大指ト他指トヲ以テ榛栗昆蟲其他ノ小物ヲ  
撮取スルアリ、或ハ鳥巢ヲ侵シテ小卵雛子ヲ奪  
フアリ、或ハ亞米利加ノ猿類ニ野柑ヲ枝上ニ打  
チ皮殻ヲ破リ兩手ノ指ヲ以テ之ヲ開裂スルアリ、  
或ハ野猿ニ石ヲ以テ堅硬ナル菓實ヲ挫クアリ、  
或ハ左右ノ大指ヲ以テ双殼貝ヲ發開スルアリ、  
或ハ指ヲ以テ荆棘ノ身ニ附著セルヲ除去ス

ルアリ、或ハ相互ニ寄生蟲ヲ狩ルアリ、或ハ敵ヲ見テ石ヲ落スアリ、石ヲ投ズルアリ、然レモ其行爲少シク迂遠ナリ、余ハ親シク目撃シタルヲアリシガ、石ヲ投ズルモ未ダ精妙ナリトスル能ハズ、

猿類ノ諸物ヲ拿住スルハ其體裁甚ダ拙ナリ、因テ其手臂ナホ粗造ナルモ其用ヲナスヤ方今存スル手臂ニ異ナラザルベシトノ説アリ、是レ太ダ信ジ難シ、余ハ却テ以爲ラク若シ其樹上ニ攀ルノ障碍トナラズンバ、更ニ精妙ナル造構ノ

⑤千八百六十九年四月刊行  
四季評論第三  
百九十二葉ヲ見ヨ

⑤親麻動物略  
傳第一卷第五  
十節ヲ見ヨ

手臂コソ猿類ノ爲ニ緊要ナルベシト、然レモ人類ノ如キ完全ナル手ハマタ樹木ニ攀ヅルニ便ナラザルニ似タリ、何ニトナレバ方今世界ノ諸部ニ存スル林生猿類ハ、亞米利加ノ「アテルス」、亞弗利加ノ「コロバス」、亞細亞ノ「ハイロベーツ」ノ如キ或ハ大指ヲ存セザルアリ、或ハヤ、其他指ニ網連スルアリ、四足恰カモ拿住ノ用ニノミ供スベキ彎鈎ノ如キモノニ過キザレバナリ、

高等哺乳類中、食物探索ノ方法ヲ改ムルカ若ク

人 體 ノ 直 立 セ シ 原 由 ヲ 論 ズ  
四十五



皇同上同卷第  
八十節ヲ見ヨ

ハ或ル他ノ事情ノ變ゼシヨリ漸次林中ヲ出テ  
生活ヲ他ニ移セシ者アリ其以降行動ノ情狀ヲ  
一變シ遂ニ或ハ四足類トナリ或ハ二足類トナ  
ルハ區域ヲコロニ濫觴セリ大猴ノ如キハ常ニ  
丘陵崑野ヲ周遊シ樹ニ攀ル等ハ已ヲ得ザル  
ノ時ニ止レリ故ニ其歩行ノ情狀犬狗ニ類ス  
ルヲ致セシナリ獨リ人類ハ二足類トナレリ其  
二足類トナリ身體ノ直立セルハ人體特質ノ一  
ニノ而シテ此ニ至リシハマタ深キ故ナシトセ  
ス夫レ人類ノ手ハ千變萬化ノ妙用ヲ備ヘヨク

千八百三十  
三年刊行  
地高得雅  
三十八葉中  
手論ヲ見ヨ

心意ノ欲スルトコロニ隨ハザルナシ人類若シ  
手ニ此妙用ヲ備ヘズンバ天地間ニ在テ生物最  
高ノ現位ヲ占ルニ至リシヲ未ダ知ルベカラズ  
查爾斯白爾君ノ言以テ徵スベシ曰ク<sup>⑤</sup>人類ハ  
手ハ普子ク機械トナリ而シテヨク不能ト相變通  
シテ妙用極リナキハ人類ハ萬物ニ靈タル所以  
ナリト然リト雖モ手臂ノナホ身體ハ支柱トナ  
リ行動ハ機械トナリ攀樹ハ要具トナルノ日ニ  
在テハ其用未ダ武器ヲ製シ石ヲ擲チ矛ヲ放  
ニ適セズマタ此手臂ヲ以テ身體ハ支柱トナシ

人祖論 卷二

行動ノ機械トナシ攀樹ノ要具トナス如キ粗暴  
 ハ行爲ハ指頭ノ精妙ナル使用ニ欠クベカラザ  
 ル觸官ヲ害セリ是ヲ以テ二足類トナルハ人類  
 ノ爲ニ非常ノ利アリ且手臂ハ勿論腰部以上ハ  
 活動ノ自由ヲ占ム進退屈伸意ハ如クナラサレ  
 バ一事一行爲ヲ成ス能ハズ是人類ノ勢ヒ遂  
 ニ足立セザルベカラザルニ至リシ所以ナリ而  
 マ足首ハ廣大ヲ致シ大趾ハ形狀ヲ變ゼシ等ハ  
 ミナ此身體直立ヲ大成センガ爲ハ主旨ニ出テ  
 タリ六タ足ハ拿住力ヲ失セシ如キハ避クベカ

千八百六十八年刊行哈客爾氏造化史論第五百七葉ニ人類ノ二足類トナリシ所以ニ係リ名論アリ○學士不西人類ノ足ヲ以テ拿住機トナシ珍シキ例ヲ示セリ千八百六十九年刊行駝駱論考第百三十五葉窩龜氏マタ説アリ有脊骨動

ラザルハ結果ト謂フベシ夫レ手ノ愈々握ヲ專  
 ラニスルヨリ足ノ愈々身體支柱及ヒ運搬ラ職  
 ルニ至リシハ動物普通ノ規則ニノ所謂體部  
 分業法ニ適ヘルモノナリ然レモ民ニ未ダ足  
 ハ拿住力ヲ全失セズナホ之ヲ以テ喬木ニ攀ガ  
 又ハ之ヲ他ニ使用スル者アリ  
 若シハ脚足ヲ以テ堅立シ手臂ニ自由ヲ與フ  
 ルハ人類ハ爲ニ利便ナル下營生戰ニ利ヲ得シ  
 一事ヲ以テモ明カナラハ愈々此身體直立ヲ  
 全成シ二足類トナルハ人類祖ノ爲ニ至利至便ナ

且論卷二  
 四十六

ル。マ。タ。論。ヲ。埃。ダ。ガ。ル。ベ。シ。即。チ。彼。ノ。石。片。推。棍。  
ヲ。以。テ。身。ヲ。警。衛。シ。畜。類。ヲ。狩。リ。食。物。ヲ。覓。ム。ル。等。  
ニ。適。ス。ル。ヲ。致。セ。シ。如。キ。ハ。ミ。ナ。此。ニ。出。デ。タ。リ。而。  
ハ。身。體。造。構。最。モ。其。宜。シ。キ。ヲ。得。タ。ル。者。ハ。最。モ。久。  
シ。キ。ニ。堪。ヘ。最。モ。事。ヲ。成。シ。最。モ。多。ク。生。殘。セ。シ。ナ。  
リ。然。リ。ト。雖。モ。一。朝。ゴ。リ。ラ。及。ビ。其。他。二。三。ノ。同。類。  
ノ。全。ク。亡。滅。シ。タ。ラ。ン。ニ。ハ。論。者。ハ。必。ズ。四。足。類。ト。  
二。足。類。ト。ノ。間。ニ。存。セ。シ。獸。類。ハ。何。レ。モ。行。動。ニ。適。  
セ。ザ。リ。シ。ト。非。常。ナ。リ。因。テ。生。物。ノ。四。足。類。ヨ。リ。二。  
足。類。ニ。遞。進。ス。ベ。キ。所。以。ナ。シ。ト。ス。ベ。シ。然。レ。ド。爰

ニ。宜。シ。ク。察。セ。ザ。ル。ベ。カ。ラ。ザ。ル。モ。ノ。ア。リ。夫。レ。似。  
入。猿。類。ハ。方。今。現。ニ。四。足。類。ト。二。足。類。ト。ノ。間。ニ。ア。  
リ。然。ハ。其。身。體。ハ。ナ。ホ。ヨ。ク。其。生。途。ニ。適。ス。ル。ハ。誰。  
ア。リ。テ。之。ヲ。疑。ハ。者。ナ。シ。ゴ。リ。ラ。ハ。行。ク。ニ。前。肢。ヲ。  
用。フ。ル。コ。ト。ア。リ。ト。雖。モ。マ。タ。ヨ。ク。踉。蹌。ト。ノ。立。走。シ。  
長。臂。猿。ハ。數。面。臂。ヲ。以。テ。二。個。ノ。倚。杖。ト。ナ。シ。身。體。  
ヲ。其。間。ニ。運。送。シ。バ。イ。ロ。ベ。ト。ト。ノ。一。種。ハ。習。ハ。ズ。  
ノ。立。走。シ。頗。ル。迅。カ。ナ。ル。者。ア。リ。然。レ。ド。ミ。ナ。行。步。  
拙。劣。ニ。ノ。危。嶮。ナル。趣。向。ア。ル。ハ。遠。ク。人。類。ニ。若。カ。  
ザ。ル。所。ナ。リ。之。ヲ。約。ス。ル。ニ。現。存。猿。類。ハ。行。步。ス。ル。

且論 卷二 四六〇

④千八百七十  
二年刊行人類  
學評論附錄第  
二十六章中博  
士貌路如尾春  
推造構論ヲ見  
ヨ

情態ハ四足類ト二足類トハ間ニアリ、然レ公平  
ナル論者⑤ノ主張スル如ク、似人猿類ハ身體造  
構ヲ以テ四足類ニ類似スルヨリ更ニ二足類ニ  
密似セリ、

人體ノ直立セシヨリ生ゼシ變化ヲ論ズ  
人祖ノ身體益起立スルニ隨テ、手臂ハ益、拿住抱  
握等ノ器具トナリ、脚足ハ益、身體支柱及ビ行動  
ノ機械トナリタリ、故ニマタ身體造構ニ他ノ諸  
變化ヲ生ズベキハ勢ヒ自然ノ理ナリ、尻骨盤ハ  
廣大ヲ致シ、脊骨ニ奇異ナル屈曲ヲ生シ、頭顱ハ

④千八百六十  
八年十月印行  
人類學評論第  
四百二十八葉  
ニ譯述セル體  
體古形論〇マ  
タ千八百六十  
六年刊行、廣瀨  
氏有脊骨動物  
解剖論第三卷  
第五百五十一  
葉ヲ見ヨ

位置ニ變態ヲ來セシ如キハミナ、身體ニ於ケル  
影響ナリ、博士書方仙⑥ハ人體ハ乳房狀ヲ成シ  
タルハ、即チ身體直立ハ結果ナリトイヘリ、  
シヅシヅパンツシ等ニ於テハ頭顱未ダ乳房狀  
ヲナサズ、ゴリラニ至リテハ微ニ其狀アリト雖  
モ人類ニ於ケルヨリ特ニ瓊少ナリ、其他人類ノ  
立體トナリシヨリ生ゼシ變化ハ勝テ算フルニ  
違アラズ、總テ此ノ如ク、屬シテ生ゼシ變化ハ  
或ハ天然撰擇ニ出ルモノアリ、或ハ世々使用多  
端ノ結果ニ係ルアリ、或ハ甲部ヨリ乙部ニ感觸

人類學 卷三 四九〇

セシ影響ニ歸スルアリ、其區域ヲ審定スルハ得  
テ難シトス、マタ數此等ノ諸因ノ相連合シテ一  
種ノ變化ヲ生ズルアリ、或ル種類ノ筋肉ト其附  
著スル骨冠ト平日ノ使用ニ依テ強大ヲ成ス者  
アルガ如シ、是レ即チ變化ノ幾分カ日々ニ漸成  
シ、且其利用ノ幾分モ亦日々ニ實果ヲ結ビシ者  
ナリ、是故ニ變化ヲ生ズルノ最モ勝レタル者ハ  
生殘スル者最モ多キニ居ル、

牙ノ衰微セシ所以ヲ論ズ

一ハ以テ人體直立ノ原因ニメ、一ハ以テ人體直

立ノ成果ナル手臂ノ妙用窮リナキハ、マタ間接  
ニ他ノ變化ヲ身體ニ致セリ、既ニ論ズル如ク人  
祖ノ男性ハ固ヨリ牙ノ大ナルヲ存セシ者ナリ、  
然レモ其習慣ヲ變ゼシ以來仇敵ト争フハ際石  
塊、推棍、兵器ヲ使用スルニ至リシカバ遂ニ頤齧  
齒ヲ廢スルニ及ベリ、是故ニ頤齧齒ハ漸々  
カ其形狀ヲ衰小セリ、其所以ハ類似ノ諸件ニ明  
カナリ、マタ下編ニ至リテハ密ニ符合スル諸例  
ヲ以テ之ヲ説明スヘシ、男性及嚙類ノ牙ハ衰減  
スルニ隨テ其角ノ暢發セルアリ、馬ノ牙ハ衰減

⑤ 十八百六十  
八年印行、駝韻  
論評第五十七  
節

スルニ隨テ門齒及ビ馬蹄ヲ以テ交爭スルノ風  
習ヲ成セルアリ、ミナ彼此ハ關係ヲ觀ルニ足レ  
ル、爾知彌亞及ビ其他ノ者ノイヘル如ク⑤、男性似  
人猿ノ成壯ニ達セシ者ハ頭形ヲ以テ人類ニ異  
ナリ、其容貌大ニ恐怖スベキ所アリ、是レ顯筋ハ  
暢發セルヨリ頭顱ニ生ゼシ結果ナリ、故ニ人類  
ノ祖先ニ於テモ其成年ハ頭形ハ愈現形ニ類似  
セルハ愈其顯齒ハ衰小セル日ニ在リシモノト  
ス、男子ノ牙ノ衰小スルニ隨テ其影響ノ終ニマ

ク女子ノ齒ニ及ビシヤ明ケシ、其所以ハ之ヲ下  
編ニ述ブベシ、

頭顱ノ大ヲ増シ形ヲ變ゼシ所以ヲ論ズ  
各種ノ心能ノ暢發スルニ隨テ腦漿ハマタツノ  
大ヲ増セリ、故ニ人腦ノ大ノ人體ニ於ケル比例  
トゴリテ若クハ「チラング」ノ腦大ノ其體ニ於ケ  
ル比例トヲ照較スルニ、人腦ハ大ハヨク其心能  
ハ優高ナルニ符ヘリ、且之ヲ昆蟲ニ徵スルニ蟻  
及ビ其他ノ四翼蟲類ハ約テ大ナル顯系筋ヲ有  
シ之ヲ甲蟲ノ如キ心カノ劣レル者ニ比スレバ

①千八百五十年印行地若丁博物學年表第三編第十四卷動物部第二百三葉及千八百七十年印行魯氏マスマガミトリ了解剖及性理論第十四卷ヲ見ヨ

殆ンド數倍セリ然リト雖モ二匹ノ動物ナリ、二人ノ人類ナレ其腦漿ノ立方積ヲ以テ其心力ヲ精測スル能ハズ、動モスレバ腦漿ノ小ナル非常ニ出ルモ却テ心力ノ強大ナルマタ非常ニ出ルアリ、蟻ハ本性、心力、情愛ノ機活ナルヲ以テ人ヲメ感動セシムルモ、ナホ其纈系筋ハ小ニノ嬰粟ノ四分一ニモ及バズ、此ニ由テ之ヲ觀レバ、蟻ノ腦漿ハ宇宙間ニ存スルトコロノ至奇至妙ナル物質ノ一ニシテ、其最微分子ノ如キハ或ハ人腦ノ右ニ出ルモノナランカ、

②千八百六十九年印行理學雜誌第五百十三葉  
③千八百七十三年印行人類學評論中貌路加氏撰譯論千八百六十四年印行英譯簿積的氏人類論第八十八第九十葉ノ引用及千八百三十八年印行普理加德人體沿革史第三百五葉ヲ

人腦ハ大小ト人智ハ開否ト符合スル所以ハ頭顱ヲ以テ蠻野ハ人民ト開明ハ人民トヲ比較シ、古代ハ人民ト今代ハ人民トヲ比較シ、加ハルニ有脊骨全種ハ類例ヲ參考スレバ、マタ太ガ分明ナリ、學士濠奈德大未ノ研究セシ所ニ據レバ、歐洲人ノ頭顱ハ平均シテ其内部ニ九二。三立方英寸ノ空處アリ、亞米利加人ニ於テハ此空處ハ七五。ニノ亞細亞人ニ於テハ八七。一アリ、濠洲人ニ於テハタゞニ八一。九ナリ、博士貌路加嘗テ二種ノ頭顱ヲ檢察セシニ、巴理ノ南部埋葬地ヨ

人祖論 卷二

見、  
 同上論文中  
 貌路如氏ノ説  
 ニ據レバ開明  
 セル人民ノ頭  
 殼ハ平均シテ  
 其度量ヲ減ヤ  
 リ是レ人民開  
 明ニ至レバ漸  
 ヤク慈善ノ道  
 立テ爲ニ未開  
 ノ日ニ在テハ  
 除去セラレベ  
 キ如キ心身ノ  
 柔弱ナル者ト  
 雖モ保存セラ  
 レ而シテ野蠻ノ

リ出シ第十九回百年代ニ屬スル鬮體ハ或ル洞窟ヨリ出シ第十二回百年代ニ屬スル者ニ比スレバ其大ナル下千四百八十四ノ千四百二十六ニ於ケルガ如キ比例ヲナセリ且此増大ハ實測ニヨルニ全ク鬮體ノ前部ニソ所謂智能ノ屬スルトコロナリ普理加徳ハ古今英國人民ノ鬮體ヲ比較シ今代ニ屬スルモノヲ以テ甚ダ大ナリトセリ然レド遠キ上代ノ鬮體中ニモ尼安德撒ヨリ出シ名高キ鬮體ノ如クヨク暢發シテ濶大ナルモノアリ  
 ①獸類ニ就テハ拉耳埵的氏  
 ②ヨ

人民ニ在テハ却テ強壯ニシテ非常ノ艱難ヲ忍テ居ル所以ナリト云ス因テハ太古ノ鬮體ニ在リシトシテ種族ノ頭殼ハ概シテ今代ノ鬮體人ヨリ遙カニ大ナル所以ノ奇事ヲ解セリ  
 ③千八百六十八年六月一日

クコ、ニ及ビ哺乳類ノ第三期地層ニ屬スルモノト其第一期即チ今代ニ屬スルモノトヲ比較セシガ今代ニ屬スルモノハハタ均シク鬮體ハ大ニメ其迂曲ハ精妙ナルヲ存セリ然レドマタ之ト少シク異ナルモノアリ余既ニ之ヲ他ノ書ニ論述セシガ  
 ④家生兎類ノ鬮體ハ却テ減衰シ野兎ノ鬮體ヨリ甚ダ小ナルニ至レリ是レ他ナシ數世小籠ハ中ニ閉居セルヨリ卒ニ才智ヲ研キ本性ヲ用ヒ五官ヲ使ヒ活動ヲ做ス下減少セシ所以ナリ

人類論 卷三 五十三



印行學術新報  
 ◎養剛動物變  
 進論第一卷第  
 百二十四葉ヨ  
 リ第百二十九  
 葉ニ至ルヲ見  
 ヲ

人類ハ腦漿及ビ骨髓ハ重量ハ増加セシハマ  
 之ヲ支フル脊骨ハ暢發ヲ促シ殊ニ人體起立ハ  
 際ニ在テ其然リシハ毫モ疑ハシ且腦漿内部ハ  
 歴カハマタ此體形ハ變化ニ乘シ頭形ニ影響ヲ  
 與ヘシモハハ如シ蓋シ其容易ニ然ルベキ所以  
 ハ之ヲ數件ノ實事ニ徴セリ人類學者ノ說ニ據  
 レバ頭形ノ變ゼシハ小兒ノ搖籃ニ於ケル如キ  
 事情ニ出ルトイヘリ抽筋ハ常患トナリ又ハ甚  
 ダシキ火傷ハ癩痕トナリシハ永ク面骨ノ體裁  
 ヲ變ゼリ且疾病ノ爲ニ小兒ノ頭顱ヲノ或ハ横

千八百六十  
 八年十月刊行  
 人類學評論第  
 四百二葉中書  
 方仙ノ說ヲ見  
 ヲ○學士皆傍  
 ヲハ造靴職ノ  
 如キ業ヲ營ム  
 者ハ平生其頭  
 顱ヲ前ニ垂ル  
 ヲヲ以テ額形  
 ヲ圓大ニシ且  
 之ヲ前ニ突出  
 セシムトイハ

向ニシ或ハ空向ニシ以テ長ク寐子シメシヨリ  
 兩眼ノ中孰レカ其位置ヲ變ジ若クハ腦漿壓力  
 ノ方向ヲ轉ゼシヨリ頭形ニ變化ヲ生ゼシモノ  
 アリ◎長耳免ハ一方ハ耳ヲ前面ニ垂レシムル  
 ハ如キ瑣小ノ原由アリテ其一方ハ頭骨ヲ前部  
 ニ傾ケシヨリ之ヲ遂ニ他ハ一方ハ頭骨ト同  
 一ナル形質ヲ失ハシメカク總テ動物ハ其何種  
 タルヲ問ハズ身體ニ大小ヲ致シ而シテ心カニ増  
 減ヲ生ゼザルカ又ハ心カニ増減ヲ生シ而シテ身  
 體ニ大小ヲ致サレバ必ズ其頭形ヲ變ズルニ

人類學 卷二

養馴動植變  
進論第一卷第  
百十七葉及ビ

至レリ、是レ余ガ家兎ニ就テ實察スル所ナリ、其  
一種ハ野生ヨリ甚ダ大ナルニ至リ、他ハ一種ハ  
殆ンド同形ヲ保テリ、而ルニ兩種トモ身體ニ大  
ヲ致セシ割合ニ比スレハ非常ニ腦漿ヲ减小セ  
リ、故ニマタ其餘影ハ頭顱ニ延及セシモノアリ  
其形ミナ變ジテ長大ヲ成セリ、余始メテ之ヲ一  
目セシ片ハ實ニ怪シムニ堪ヘザリキ、例ヘバ一  
ハ野生一ハ家生ノ種ニテ殆ンド同幅ナル二個  
ノ頭顱ニシテ、其長始ニ於テハ三英寸及ビ〇一五  
トナリ、終ニ於テハ四英寸及ビ〇三トナリタリ

第百十九葉ヲ  
見ヨ

千八百六十  
八年十月刊行  
人類學評論第  
四百十九葉中  
書方仙ノ引用  
ニ據ル

⑤ マタ各種ノ人類中顯然タル性質ノ一ハ頭顱  
ノ變形ナリ、或ハ其長キモノアリ、或ハ其圓キモ  
ノアリ、是レマタ彼ノ兎類ト其理由ヲ同ウスル  
モノ、如シ何ニトナレバ維爾加ノ發見ニ據ル  
ニ、身長ノ短ナル者ハ頭顱ノ横大ニシテ、身長ノ長  
キ者ハ頭顱ノ縱長シ、而シテ身長ノ長キ者ハ長  
大ナル家兎ニ似タリ、長大ナル家兎ハ總ジテ頭  
顱ノ長形ナルモノナレバナリ、  
以上ニ論ズル所ハ人類ハ身體ハ長大ヲ致シ頭  
顱ハ圓形ヲナセシ所以ヲ詳カニセリ、而シテ此等

ハ實ニ人類ハ獸類ニ異ナル所以ハ最モ著シキ  
モハナリ、

人類ノ赤身ナル所以ヲ論ズ

更ニ人類ノ獸類ニ異ナリトスベキハ皮膚ノ露  
出セルニ在ルガ如シ然リト雖モ鯨白鯢牛面魚  
河馬ハ如キモハマタミナ赤身ナリ而ノ此ノ如  
キハ却テ其水中ヲ游泳スルニ便ナルトコロヲ  
リ加フルニ寒水ニ生活スルモノハ厚臙ノ之ヲ  
被フアリ以テ彼ノ海狗海獺ノ毛衣ニ於ケル如  
キ用ヲ成シ而ノ赤身ニノ體温ヲ散失スルモ決

◎高麗有脊骨  
動物解剖論第  
三卷第六百十  
九葉ヲ見ヨ

ノ傷害トナル患ナシ、犀ト象トマダ殆ンド赤身  
ナリ之ニ反シテ往昔北極地方ニ生活セシ動物  
ニノ既ニ其種類ノ凶失セシモノアリ此等ハミ  
ナ長毛ヲ以テ身ヲ被ヘリ然レバ則チ犀象等ノ  
赤身ナル如キハ温熱ノ爲ニ其毛衣ヲ脱失セシ  
モノニ似タリ蓋シ印度ノ高燥冷涼ナル地方ニ  
生活スル象ハ之ヲ低濕嚴熱ナル地ニアルモノ  
ニ比スレバ非常ニ多毛ナリ◎是ニ由テ之ヲ觀  
レバ人類ノ毛衣ヲ脱失セシモ或ハ上古熱帶地  
方ニ生活セシ所以ニアラザルヲ得シヤ且マタ

類論 卷五 五

千八百五十九年刊行博物學大意第二百十五葉ヨリ第二十七葉ニ至ル以西德鏡弗禮ノ説ヲ見ヨ  
 千八百七十四年刊行尾加及亞博物志

人類ノ毛衣ヲ脱失セシハ人體ノ直立セシ以前ニ在テ、方今長毛ノ留存スル男子ノ胸部、面部及ビ男女ノ四肢ノ軀幹ニ接續スル部分ノ如キハ當時太陽ノ熱ニ曝露セザリシ故ヲ以テ然ルニ似タリ、然リト雖モ、若シ果シテ然ラバ、頭頂ハマタ不思議ナリトイフヘシ、本部ハ常ニ太陽ニ曝露セシ部分ナレバ固ヨリ毛髮ノ存スベキ所以ナシ、然ルニ却テ之ニ富ノリ、是ハ人類ハ赤身トナリシ原由ヲ以テ太陽ノ熱ニ歸スルノ説ト矛盾セリ、白耳的氏以爲ラタ<sup>⑤</sup>熱帶地方ニ於テ

第二百九葉及ビ千八百七十四年刊行田孫氏編輯總督府雜錄第一卷第四百四十葉ヲ見

毛髮ノナキハ人類ノ爲ニ益アリ、何ニトナレバ此地方ノ住民ハ多ク狗蠅其他ノ寄生蟲ニ惱マサレ、屢瘡瘡ヲ患フルモノアリ、因テ毛髮ナクシバ則チ此等ノ患ヲ免カル、ニ至ルベシト、然レバ此一條ハアルヲ以テ人類ハ天然ハ撰擇ニ出デ、赤身トナリシ者ナリト臆斷スルハ、マ余ガ肯テ取テザル所ナリ、且古今熱帶地方ノ四足類ヲ歴觀スルニ未ダ一モ此患ヲ除去スルノ便宜ヲ得タル者アルヲ知ラズ、然リ而シテ其然ル所以ニ就テハ蓋シ説アリ、人類トイヒ、殊ニ婦女ニ毛

且論 卷二 五五

髮ノ少ナキハ全ク粧飾ノ主旨ニ出テタルヤ明  
カナリ其詳細ハナホ之ヲ男女相互ノ撰擇ト題  
セル條下ニ討論スベシ抑男女相撰ノ主義ニ據  
レバ高等哺乳類ノ中人類ト人類以下ノ動物ト  
毛髮ニ係リ大ニ異ナルトコロアルハ敢テ訝ル  
ニ足ラズ男女相互ハ撰擇ニ由テ來セシ性質ハ  
總シテ密接ナル有親ハ生物ト雖モ往々不同ハ  
非常ナルモハアレハナリ

人類ノ尾ヲ失セシ所以ヲ論ズ

通俗ノ說ニ據レバ人體ニ尾ノナキハ抑人類ノ

獸類ニ異ナル一大區別ナリトイヘリ然リト雖  
モ生物ニ尾ハ無キハ獨リ人類ニ止ラズ猿類中  
人類ニ密似スル者アリマタ之ヲ欠ケリ其長短  
ハ如キニ至リテハ同種ハ生物ト雖モ其不同ハ  
甚ダシキ者アリカカハ一種ハ全身ヨリ長  
キ尾ヲ有セリ其尾脊椎二十有四ノ大數ニ及ベ  
リ他ノ一種ハ其尾漸ヤク四脊椎ヲ以テ成ル其  
短カキト殆ンド之ヲ見ルニ苦メリマブトシク  
一種ニ其尾長クシテ尾脊椎二十有四ヲ舍メ  
アリ而メ其一種ナルコトドレルノ尾ハ甚ダ短

千八百六十五年印行動物學社報告第五百六十二葉及五百八十三葉中、仙、慈、日、美、波、的、氏、英、國、博、物、館、目、録、體、骨、ノ、條、下、頤、禮、氏、有、脊、骨、動、物、解、剖、論、第、二、卷、第、五、百、七、十、七、葉、中、隔、溫、氏、及、博、物、雜、誌、第、三、卷、第、二、百、四、十、四、葉、中、以、西、德、範、弗、禮、ノ、説、ヲ

縮セル小尾脊椎十箇ヨリ成レリ、久未ニ據レバ  
 ④、或ハタゞ其五箇ナルモアリトイフ、約テ尾ハ  
 長短ニ係ラズ、益、末端ニ至レバ、益、尖圓ヲ成セリ、  
 是レ即チ其不使用ニ屬シ、端筋、動脈、神系ノ衰弱  
 セルヨリ、終ニ極端ノ尾脊椎ヲメ、衰瘠セシメタ  
 ル所以ノ結果ナリ、今其長短ヲ致セシ原由ハ姑  
 ラク之ヲ舍キ、先ヅ全尾ハ落失セシ所以ヲ講究  
 セント欲ス、抑近來博士貌路加④ノ論ズル所ニ  
 據ルニ、凡ソ四足類ノ尾ニ本端ノ二部アリ、而メ  
 其分界甚ダ明瞭ナリ、即チ其本部ハ中ニ髓路ヲ

見ヨ、  
 ④千八百七十  
 二年刊行人類  
 學評論中尾脊  
 椎造構論

具ハ外ニ凹凸ヲ成ス其狀一モ通常脊椎ニ異ナ  
 ルトコロナキ完全ナル尾脊椎ヲ以テ成リ、其端  
 部ハ髓路ヲ具ヘズ、平滑ニメ更ニ通常脊椎ニ類  
 似スルトコロナキモノヲ以テ成レリ、然レ尾ハ  
 人類及ビ似人猿類ニ於テハ敢テ外形ニ見ヘザ  
 レ、其其實ニ生物トモ明カニ之ヲ存セリ、加之其  
 造構同シク、一ノ模型ニ由レリ、人類ニ在テハ尾  
 ノ端部ニ於ケル尾脊椎ハ即チ尾龍骨ヲ成セリ、  
 然レ其形其數ノ衰小セルヲ以テモノノ不具物  
 タルハ論ヲ俟タズ、其本部ニ於ケル尾脊椎ハ其

尾脊椎ニ於ケル尾脊椎ハ其  
 尾脊椎ニ於ケル尾脊椎ハ其  
 尾脊椎ニ於ケル尾脊椎ハ其

數漸ヤク二三ニノミナ縮結シ、而メ其暢發モ一  
 タ停住セリ、但シ他ノ獸尾ノ同部分ニ於ケルヨ  
 リモ、其幅タルヤ遙カニ大ニシ、其平狀ヲ成ス  
 遙カニ潤ナリ、之ヲ名ヅケテ薦部所屬ノ脊椎ト  
 イヘリ、其用專ラ體ノ内部ヲ支ヘ、其他ナホ種々  
 ノ緊要ナル効用アリ、而メ其形狀ニ來セル變化  
 ハ實ニ人類ハ立體トナリ、似人猿類ハ半立體ト  
 ナリシ所以ニ出デタリ、貌路加氏ハ向ニ異說ヲ  
 唱ヘシカド方今之ヲ改新セシ人ナレバ、此說ノ  
 如キハ殊ニ據ルベキアリ、人類及ビ高等猿類ノ

百十葉  
 學社報告第二  
 二年刊行動物  
 百十八百七十

本部尾脊椎ノ變ゼシハ或ハ直接或ハ間接ナル  
 モ要スルニミナ天然ハ撰擇ニ由ラザルハナシ  
 夫レ尾龍骨ハ正シク尾ニメタハ其不具物ニ過  
 ギザル所以ハ明瞭ナルニ至リテハ復タ何ヲカ  
 云フベケンヤ、然レモ尾ノ外部ニ在リシ部分ノ  
 悉皆落滅セシハ摩捺ニ由テ然ルニ至レリトノ  
 說ハ往々之ヲ一笑ニ付スル者アリ、惟ハザルノ  
 至リナラズヤ、世ノ人忽チ之ヲ聞キナバソレ或  
 ハ然ランモ、少シク之ヲ思察セバ、輒チ容易ニ其  
 理由ヲ觀ハ、學士安德爾遜<sup>(2)</sup>ハ殊ニ之ヲ研究シ

タリシガ、カカス、ブランニ、スノ非常ナル短尾ハ根底ニ埋没セルモノヲ合セタゞニ十一個ノ脊椎ヲ以テ成レリ、殊ニ其極端ハ肉筋質ニノ脊椎ナク、之ニ次ク部分ハ不具ナル尾脊椎五個ニ、其長英法一分五厘ヲ出ズ、且此非常ニ短小ナル部分ハ常ニ偏曲シテ鉤形ヲ成セリ、尾ノ本部ハ漸ヤク四個ノ小脊椎ヲ以テ成リ、其長英法一寸強ニスギザルモノナリ、此猿類ハ歩行スル際必ズ此短尾ヲ樹立シ、以テ全長殆ンド四分ノ一又常ニ左ニ曲折セリ、而メ此曲折セル部分

ハ尻脛上部ノ罅隙ヲ填塞スルガ故ニ其坐スル片ハ必ズ膝下ニ藉カレ、竟ニマタ外面ノ硬粗ヲ成シタリ、學士安德爾遜觀察ノ大意ヲ約シテ曰ク、此等ハ實事ニ一ハ理由アリ、即チ此猿尾ハ短小ナリト雖モ、猿類ハ通情トシ、其坐スル片ハ必ズ之ヲ膝下ニ藉ケリ、而シテ其脛外ニ出デザルヲ以テ之ヲ考ヘバ、此猿尾ハ圓曲シテ脛隙ニ入ルハ其坐下ニ藉カルハ、際尻脛ト大地トノ間ニ壓抑セラルハ、免カレハ、其爲ニ、即チ其故意ニ出デタルモ、ハ、如シ、而シテ其終ニ圓曲ハ性

大組論 卷三 六一〇



④千八百七十  
二年刊行動物  
學社報告第七  
百八十六葉

⑤養別動植變  
進論第二卷第  
二十一葉ヨリ  
二十九葉ニ  
至ルヲ見ヨ

ヲ成スニ至リシ所以モ、タコハニアリ、然レハ  
則チ其外面ハ硬粗ヲ成セシ如キハ、敢テ怪シム  
ニ足ラズト、學士謨里<sup>⑥</sup>ハ廣ク生物園ニ遊ビ同  
種ノ生物ヲ查覈シ、并ドニ其尾ノ少シク長キ類  
似物ヲモ檢察セシニ、此等ハ、三ナカ坐スルホニ必  
ズ其尾ヲ臀側ニ卷轉セリ、因テ長短ニ係ラズ其  
根本ハ摩擦ヲ免カレザル者ナリトイヘリ、夫レ  
身體ノ一部ヲ割去スル片ハ其成果屢遺留スル  
アリ<sup>⑦</sup>、其證少シトセズ、故ニ短尾猿類ハ尾ハ如  
キ固ヨリ不用ニ屬スレバ、益摩擦ヲ經益、衰耗シ

終ニ微々タル不具物トナリシハ免カルベカラ  
ザルハ、勢ヒトイフベシ、マカカス、ブラン、ヨト、  
ハ微小ナル尾ハ如キハ、即チ此理ニ由レリ、而  
マカカス、イコ、イダ、左、ト、ス、及ビ其他高等猿類ニ  
於テ全尾ハ欠落セシ所以モ、マタコハ、ニ出デ、タ  
ルヤ必セリ、然レバ、則チ深ク之ヲ推究スルニ、人  
類及ビ似人猿類ニ於テ全尾ノ落失セシ所以モ  
他ナシ、其端部ハ世々外物ニ接觸シテ、害セラレ  
本部ハ、減小轉衰シテ、或ハ半立體、或ハ全立體  
ナリシ事情ニ適應スルヲ致セシモノナリ、

人 類 論 卷 三 三

人類ノ特有スル性質ノ由テ來リシ方法ハ、或ハ直接天撰ナルアリ、或ハ間接天撰ナルアリト雖モ、之ヲ要スルニ、天然ノ撰擇ニ由ラザル無キ所以ハ既ニ之ヲ明論セリ、然リト雖モ更ニコ、ニ述フベキモノアリ、抑身體造構ニ生ゼシ變化ノ未ダ生物ヲノ風俗習慣若クハ衣食住其他生路ノ境遇ニ適セシムルノ用ヲ成サザルモノハ、天然ノ撰擇ニ由ラザルモノ、如シ、然レバ敢テ何

等ハ變化ハ極メテ生物ニ有用ナルモハ、何等ハ變化ハ極メテ之ニ無用ナルモハナリトハ得テ之ヲ斷言スベカラズ、何ニトナレバ體部ノ使用ニ係リ人智ノ及フトコロ殊ニ限リアリ、苟モ身體ヲ以テ氣候ノ變化食物ノ更替ニ適應セシメント欲スレバ其血液ノ成立肉網ノ組織ニ係リ何等ノ改變ヲ要スベキヤハ得テ知ル能ハザレバナリ、マタ連發變化ノ主義モ忽視スベカラズ、既ニ以西德饒弗禮人類ノ例ヲ以テ講究セシ如ク造構ノ奇異ナルモノ多ク此主義ニ由テ

◎養馴動物植環  
進論第二卷第  
二百八十葉及  
二百八十九  
二葉ヲ見ヨ

解スルヲ得ルアリ、連發主義ニ係ラズ一部分ノ  
變化シテ他ノ部分ノ使用増減セルヨリ更ニ之  
ニ不意ハ變化ヲ致スモアリ、毒蟲ノ爲ニ五倍子  
ノ如キモノ多ク植物ニ生ヅ、又ハ某種ノ魚類ヲ  
食シ若クハ蝦蟆ノ毒ニ感ゼシ鸚哥ノ羽色ニ變  
化ヲ生ズル如キ種類ハ變化モアリ◎是等ハ身  
體血液ノ故アリテ變ズルキハ隨テ他ニ影響ヲ  
與フル所以ノ理ヲ明カニセリ、其他變化ノ一タ  
ビ生ヅテヨリ古來陸續トメ有用ノ用途ニ適セ  
シモノハ已ニ一定ノ造構トナリヨク遺傳スル

モアリ察セズンバアルベカラズ、  
此ハ如クニ説キ去レバ則チ天然撰擇ハ直間兩  
接ニ結果ヲ生ズルヤ甚ク廣シ故ニ其境域ハ如  
キハ未ダ遠カニ定ムベカラザルモハア然リ  
ト雖モ頃者拿日黎ノ植物論博士貌路加ノ動物  
論其他諸家ノ論説ヲ一讀シ、熟以爲ラク生物祖  
宗論ノ初出數版ニ於テ余ガ論ズル所ハ天然撰  
擇即チ最適物生殘ノ主義ニ歸スルヲ多キニ過  
ギタリト、因テ其第五版ニ於テハ大ニ之ヲ訂正  
シ、此説ヲ以テ解明ヲ爲スモノハ專ラ造構ノ改

進化論

卷五

進シタル變化ニノミ限レリ、然レモ、僅カニ  
二三年來ハ、閱歴ニ據レバ、方今殆ント不用ハ造  
構ニ似タルモ、後來有用トナルベキ所以ヲ審カ  
ニスルモハ往々コレアリ、是等ハ所謂天然ノ撰  
擇ニ由ラザルヲ得ザルナリ、然リ而メ向ニ論ズ  
ル所ハ造構ノ未ダ有益トモスベカラズ、マタ有  
害トモナスベカラサルモノニ及バザリキ、是レ  
該書ニ於ケル一大遺漏トイフベシ、然レモ、コ  
ニマタ其然ルヲ致セシ所以ノモノ無キニアラ  
ズ、抑該書ヲ著スニ方テ余ガ胸中ニ二條ノ主見

アリ第一ニ、生物ハ各特殊ハ創造ニ係ラサル所  
以テ詳カニセント欲シ、第二ニ、假令習慣ハ結果  
及ビ境遇ハ影響アリテ大ニ之ヲ佐成シタリシ  
ト雖モ、天然ハ撰擇ハ抑生物遞進ハ主因ナル所  
以テ明カニセント欲セリ、然リト雖モ、彼ノ生物  
ハ各特殊ノ創造ニ係ルノ說當時殆ンド天下ニ  
洽チクシテ、而メ余モマタ曾テ之ヲ篤信セシ者  
ナレバ、奈何トモ舊見ヲ蟬脱スル能ハズ、タミニ  
以爲ラク不具ノ部分ヲ除キ、其他各部ノ造構ハ  
其理由ノ明否ヲ問ハズ、ミナ以テ有用ナリト、ソ

レ此ノ如キ思想ノ懷裡ニ存セシハ古今天然ノ  
撰擇ニ係ル變化ヲ論ジ長密ニ涉リシ所以ナリ、  
世間或ハ人アリ、生物遞進ノ説ヲ容レ、ナホ未ダ  
天然撰擇ノ主義ヲ取ラズシテ安リニ余ガ説ヲ  
駁スルハ、該書ハ著述ニ係ル前顯二條ノ主見ヲ  
領セザル所以ナリ、蓋シ天然ノ撰擇ヲ論シ余ハ  
決シテ適度ヲ越エ甚大ニ失スル所アルヲ知ラ  
ズ、然リト雖モ若シ或ハ然ルアラバ、是レ即チ論  
勢ノ制スベカラザル所ニシテ、而メ彼ハ生物ヲ  
以テ特殊ハ創造ニ歸スルハ僻見ヲ一洗スルニ

至リテハ其功却テ大ナリトイフベシ、  
人類ハイフニ及バズ總ジテ有生物ノ身體ニ奇  
異ノ造構アリ、古來未ダ曾テ一用ヲ成ササルヲ  
以テ生理上ノ論點ヨリ見ル所全ク無用ノ部分  
ナルニ似タリ、マタ生物ニ各自個々ノ小異ヲ致  
ス無數ノ變化ノ未ダ其原由ヲ審カニセザルモ  
ノアリ、彼ノ復古造構ノ如キハタゞニ一歩ヲ進  
メ以テ此等ノ箇條ヲ推究スルニ過キザルモノ  
ナリ、所謂奇異ハ造構ハ確乎タル原由ナカルベ  
カラズ、然ハ此原由ハ其何物タルヲ問ハズ多年

人間ヨク強大ハ勢カテ有シ苟モ一定ハ方向ニ  
由ラハ其結果ハタトヒ生理上有用ハモハトナ  
ラザルモ顯然タル變化ヲ致シ敢テ目今ハ如キ  
各自ハ小異ヲ成スニ止ルベカラザルヤ必セリ  
且造構ノ變ジテ有害トナリシモノハ天然ノ撰  
擇ニ由テ漸次消滅ニ屬スベキモ有益トナラザ  
ルモノハマタ天然ノ撰擇ニ由テ永ク之ヲ一定  
不變ニ保續スル能ハズ然リト雖モ生物ノ性質  
ヲノ一定不變ナラシムルハ之ヲ誘發スル原由  
ノ劃然トメ一定不變ナルト生物各自ノ異種配

合ノ自由ニ偏頗ナラザルトニ在リ然レドマ  
タ數世代ノ長キニ在テハ一種ノ生物ニシテ此ノ  
如キ事情ニ屬シテホ數變化ヲ累經スルアリ但  
シ此等ノ變化ト雖モ固ヨリ彼ノ原由ト彼ノ自  
由トノ存在スル間ハ一定不變ニ保續セリ此原  
由ハ未ダ審カナラザレド彼ハ偶然變化ニ於ケ  
ルガ如ク境遇ノ性質ニ屬スルヨリハ寧ロ變化  
スル其生物ノ體質ニ密接セルハ甚ダ明晰ナリ  
天然撰擇以下ヲ結論ス  
現。今。人。類。ノ。多。少。變。化。シ。テ。常。ニ。同。ジ。カ。ラ。ザ。ル。ハ。

人 類 論 卷 一

七

猶他ノ諸動物ニ於ケルガゴトシ故ニ人類ノ祖  
先モマタ此ノ如キモノナルハ疑ナシ前諸條已  
ニ之ヲ詳論セリ然リ而ハ此變化ヲ來タス原由  
ト之ヲ管理スル規則トニ至リテハマタ少シモ  
古今ノ異ナル所ナキナリ總シテ動物ハ急カニ  
繁殖シ以テ生計ヲ聊ンズル能ハザルニ至レハ  
人類ノ祖先モマタ然リ故ニ營生ノ争鬪ヲ生ジ  
遂ニ天然ノ撰擇ニ馴致セシハ明カナリ而メ天  
然ノ撰擇ハ習慣ノ結果ニ補助セラレ恆ニ營生  
ノ争鬪ト相資シテ以テ其功ヲ成セリマタ男女

相互ノ撰擇ニ由テ區々タル變化ノ人類ニ生ゼ  
シモノアリ其他コ、ニ解明ヲ省略セル變化ニ  
ノ未詳原由ノ一定ナル行為ニ係ルモノアリ按  
ズルニ此原由ハ即チ數家生動物ノ身體造構ニ  
非常ノ變化ヲ生ズル所以ノモノニ異ナラザル  
ベシ、  
野蠻ノ人民殊ニ四手類ノ風俗ヲ察スルニ元始  
ノ人類且猿様人祖ノ如キモ恐ラクハ社會ヲ成  
シテ生活セシモノナリ蓋シ真ニ社會ヲナセル  
親睦動物ニ於テハ天然撰擇ハ屢各自ハ生物ニ

及ボシ之ニ由テ一社會ノ公益トナル變化ヲ保  
存スルコトアリ、譬ヘバコハ、ニ一社會アリ稟賦完  
全ナル者ノ多數ヨリ成リタランニハ、縱ヒ其長  
處本社中ニ利スルトコロナキモ之ヲ他ノ稟賦  
不完全ナル者ノ多數ヨリ成ル社會ニ比スレバ、  
社員ノ増殖迅速ニシテ而シテ戰ヒハ輒チ利ヲ得ル  
ニ至ルベシ、故ニ蟲類ノ中ニ於テ社會ヲナスモ  
ノナル工蜂ノ花粉ヲ集ムル機械及ビ刺針或ハ  
兵蟻ノ大顯ノゴトキハ一社中ニ於テ各自ノ相  
利スル所ナシト雖モ、社外ノモノニ對スレバ無

窮ノ利用アリテ之ヲ得タルハ明カニモ、所謂一  
社會ノ公益トナルモノナリ、然レモ更ニ高等ナ  
ル動物ノ社會ヲナスモノニ至リテハ各自ノ身  
體造構ニ於テ其社會ノ爲間接ノ用ヲ成スモノ  
ナキニアラザレバ、未ダ曾テ一部ノ造構モ純然  
一社會ノ爲ニ變化シタルモノアラズ、夫ノ反嚙  
類ノ角、大猴ノ大牙ノ如キハ其群隊ヲ衛護スル  
ノ用ナキニシモアラズト雖モ、專ラ女子ヲ爭取  
センガ爲獨リ男性ノ稟得シタル兵器ナリト謂  
フベシ、然レモ心力才能ハ大ニソノ趣ヲ異ニセ



其詳細ハ之ヲ第五編ニ述ブベシ、所謂心カ本  
能ハ特ニ社會公衆ハ爲賦與スルトコロニ各  
自一己ハ爲ニハカハニ間接ハ利用アルニ過ギ  
ザルモハナリ

人身ノ助ナク守ナキ情態ヲ論ス

爰ニマタ以上ニ述ブル説ヲ駁シ、人類ハ此世界  
ニ於テ最モ助ナク守ナキモノニシテ、其先未ダ進  
進セザル日ニ在テハ更ニ甚ダシキ不警衛物ナ  
ラントスル者アリ、亞爾日耳侯ノ如キハ蓋シ其  
一人ニシテ口ヲ開ケバ必ズ常ニ人體ノ獸體ニ異

④千八百六十  
九年印行  
人類論卷六十  
六葉

ナル所以ハ身體ノ助ナク守ナキ柔弱ナルニア  
リ、即チ此ノ如キ變化ハ所謂天然探擇ニ歸スベ  
カラザル事件中ノ第一ナルモノナリトイヘリ  
④且身體露出ニシテ防禦ナキ事情、守衛ノ爲ニ大  
牙爪距ノ欠乏、人類ノ柔弱遲緩ナル性質、覓食避  
難ノ爲ニ鈍劣ナル臭官等ヲ舉ゲ以テ之ヲ證論  
セリソレ此ノ如クニ求メテ反論セント欲スレ  
バ則チ其短處ナホ一ニシテ盡キズ、人類ノ樹木ニ  
急攀シ以テ敵ノ攻撃ヲ防ク能ハザルモ更ニ甚  
ダシキ短處ナリト謂フベシ、マタ非地人ノ如ク

赤身ニノ氣候ノ嚴酷ナル地方ニ生活スル者アリ  
リテ毛衣ノナキハ暖國ノ人民ニ取リ敢テ大害  
トナラザルモ何ゾ短處ナリト謂ハザルヲ得ン  
ヤ、而ルニ人類ノ助ナク守ナキ情態ヲ以テ之ヲ  
猿類ニ比スルニ彼此其情ヲ異ニセリ、猿類ニ大  
ナル牙アリ、此牙ハ獨リ男性ニ屬スルト雖モ暢  
發完全ニノ專ラ敵ト争フノ用ヲ成セリ、但シ其  
女性ハ之ヲ欠ケリト雖モマタヨク事ニ臨ンテ  
其生殘スル方法ヲ處シ得ルモノナリ  
然リト雖モ人類ハシソパンシノ如キ弱小ナ

ル生物ノ後胤ナリヤ、ヨリラノ如キ強大ナルモ  
ノ、苗裔ナリヤ未ダ之ヲ審カニセズ、是レ人體  
ノ大小、膂力ノ強弱ヲ論ズルニ方テ、人類ハ祖先  
ヨリ強大ナルニ至リシヤ、弱小ナルニ及ビシヤ  
得テ明言スベカラザル所以ナリ、竊カニ按スル  
ニ軀幹偉大、勢カ強猛ニシテ而シテ、如クモ  
カ自カラ其敵ヲ禦クニ適スルホハ、則チ其動物  
必ズ親睦交際ハ篤キ者トナルハ、難シクハ同  
情相憐ニ危急相助ケルハ如キ高尚ナル心性ヲ  
稟賦スルニ於テオヤ、是ヲ以テヤ、柔弱ナル生

物ヨリ進進セシハ人類ハ爲ニ測知スベカラザル益アリトイフベシ

人類ノ柔弱遲緩及ビ天與ノ兵器ノ欠乏等ハ敢テ短處ナリトスベキ所ニアラズ第一之ニ易フルニ心カノ靈妙ナルヲ以テセリ故ニ未ダ野蠻ノ風俗ヲ脱セザルニ似タリト雖モ之ニ由テ自カラ兵器要具ヲ調理シヨク天賦ノ短處ヲ補ヘリ試ミニ思ヘ南部亞弗利加ノ如キハ其惡獸ノ多キヲ以テ天下ニマタアルマジキ土地ナリ北冰洋諸島ノ如キハ生活ノ難キヲ以テ世界ニ比

ピナキ地方ナリ然レデナホ人類中弱小ノ最タル貌西人ノ如キ者南部亞弗利加ニ生立セリ人義斯基蒙種ノ如キ者北冰洋地方ニ活存セリ故ニ人類ハ祖先モ縦ヒ心智ハ量能ト親睦ハ性情トヲ以テハ遠ク今日最野ハ蠻民ニ下リシトモ樹木ニ攀ル等ハ如キ獸類固有ハ能カヲ失スルニ隨テ其心カヲ増加スルヲ得バマタ生命ヲ保存シ隆盛ヲ致サハルハ所以ナシ加フルニ人類ハ祖先ハ方今ヲラングハ居處ナル濠斯土刺利亞紐及尼若ハハ薄爾寧阿ハ如キ或ハ暖和ナ

且前卷二

人祖論卷之三終  
 ナ。靈。果。ル。一。危。キ。ル。人  
 ル。タ。ト。天。大。急。情。一。一  
 へ。ル。協。然。地。ノ。態。大。大  
 シ。今。合。撰。方。難。ハ。地。方  
 ノ。日。シ。擇。ニ。在。遭。カ。ニ。住  
 地。マ。偶。テ。遇。今。居。シ。カ  
 位。好。効。種。セ。ザ。ル。ノ。タ  
 ニ。機。ハ。族。ル。ノ。ラ。ン  
 達。ヲ。得。世。々。種。族。シ。ン  
 セ。ヨ。ク。遺。傳。シ。タ。ル。ニ  
 ム。ク。人。類。ヲ。習。慣。ノ。致  
 ル。ニ。足。リ。シ。モ。ノ。ノ。

人祖論卷之三終

明治十四年六月廿二日版權免許  
 同 七月 出版

纂譯者出版

神津專三郎

長野縣平民

東京小石川區小日向水道町八拾七番地

東京府平民

發兌書肆

山中市兵衛

同芝區三島町拾番地

7
3
///

